

難読地名の読み方と由来

日本国内版

関東編



上総の国いちはらの歴史を知る会

千葉県
CHIBA



©ONE COMPATH

千葉県内の難読地名 50 選 北西部編

NO	地名	読み	所在市及び由来
1	神久保	いものくぼ	八千代市。古くは芋窪・神窪・伊毛窪と書いた。室町期は伊毛窪村、江戸期には神窪村。明治22年に神久保地名になった。 地名の由来は、「いも（傾斜地の滑落土が崩壊した）・の（接続詞）・くぼ（窪み）」が「いものくぼ」から変化したと考えられる。
2	桑納	かんのう	八千代市。昔は官能村とも書かれた。神生・神納・神尾・神呪などを「カンノウ」と読み、各地に見られる。地名の由来は、「がけ地」などの地形からつけられたと思われる。
3	飯山満	はさま・はざま	船橋市。地名の由来は、「谷あいの場所：狭間（はざま）」からきているという説と、江戸時代では「米（飯）が山ほどできて満ちた土地」から付いた」という説もある。江戸時代には「上飯山満・下飯山満」の字があったという。飯山満の地形は、「谷上の地形」が特徴。
4	実靱	みもみ	習志野市。地名の由来は実靱は「御靱」とも書き、五穀の実や靱のことで、この地域の田畑が良く実ってほしいという願いを込めてつけられたという説と、三山（御山）と同じく二宮神社との関係から名づけられたという説がある。
5	生谷	おぶかい	佐倉市。地名の由来は、生谷の「生」を「いぎ」と発音するのは事の始まりを意味し、谷の始まる地に立地する事が由来という。
6	神門	ごうど	佐倉市。江戸期は神門村。寛永末年（1644年）堀田正盛が佐倉に入府したところに立村と言う。地名の由来は、香取神社への要衝の地で、神の門への入り口とみられた事や、東方にあった宮本の山王神社の入口を意味したもの。転石の多いゴロゴロした土地を指したものか、または「たき（高）と（処）」の転訛で急傾斜地と（湿地）・つか（小高くなっている所）」で、小高い給料のある鹿島川沿いの湿地と言う意味
7	中尾余町	なかびょうまち	佐倉市。江戸期から。城下の武家屋敷の増加に伴い、寛文年間に造成されて成立。地名の由来は、丘陵性台地の「鞍部」を「ビョウ」と呼ぶ事による。
8	先崎	まっさき	佐倉市。江戸期は先崎村。地名の由来は「まつ（曲）・さき（突き出した土地）」で、川の曲流部と山の突き出した地形を指したものか。または「ま（接続詞）・さき（突き出した土地）」で往古印旛沼がもつと広がった頃は岬があった事にちなむ。
9	五十土町	いかずちちょう	千葉市若葉区。雷神を祀る鎮守雷（いかずち）神社と関係があると思われる。他県にも「五十土」と言う地名がある。
10	小食土町	やさしどちょう	千葉市緑区。元は「矢指渡」「矢指土」などの字を使っていたが、海上郡に同じ「矢指」と言う村あったので、当時村に住んでいた漢学者に相談し、「大食の者は蛮からだ、小食の者は心優しいから「矢指」を「小食」の字に変えたらどうかと言われ変えたという。また、

			「御霊神社」の碑文には、「日本武尊が東国に向かう途中、当地で休憩した際に村人が献上した間食を尊が召し上がり、この事により当地「小食土」と言うようになったと言う。「や（谷津）・さらし（曝し）・ど（処）」の転訛で、湿地のある崩壊地形と言う意味。
⑪	生実町	おゆみちょう	千葉市中央区。当初は「御弓・大弓・小弓・北小弓・北大弓・北生実・生実町となった。一時南生実町・北生実町の時もあった。地名の由来は、麻積連（おみのむらじ）とその部民が住みついた事によって、この麻積（おみ）が「おゆみ」に転訛し、寛弘年間に源頼光が上総の国へ赴任の途中、八剣神社に参詣して「大弓」をいう漢字が充てられた。
12	登戸	のぶと	千葉市中央区。地名の由来は、名主鈴木利右衛門家の家譜に「筑波根の嵐を吹き降ろす富士の波間を及ぼり戸の船」と記されて書から形とって登戸村と名付くとある。
13	猪鼻	いのはな	千葉市中央区。地名の由来は、下総台地から亥の方向に突き出した舌状台地があり、この地形から付いた。
14	作草部	さくさべ	千葉市稲毛区。この地は千葉郷と同じく6世紀ころは皇室の直轄地であったと推定され、王朝時代でも相当の村落であった。三枝部の部民の居住地だったので、地名も「さきさべ」と名付けられ、それが「さくさべ」となまり、「作草部」の字が宛てられたという。
15	園生町	そののうちよう	千葉市稲毛区。地名の由来は、古代薬園生または園部が居住した事によると言われる。
16	大谷流	おおやる	八街市。鹿島川上流部の流域で「大谷流」と「小谷流」合わせて「谷流（やる）」と言う。元は稲葉村の一部であったが、天正19年（1591年）の検地の時に「稲葉」と「野流（やる）」に分かれた。その後に慶徳9年（1614年）に「大谷流」と「小谷流」に分村した。
17	四木	しもく	八街市。八街町の大字の一つで、四木は江戸時代に栽培された特に重要な4種の木で、「茶（飲料）・桑（繭を作る蚕の餌）・漆（漆器・蠟燭の材料）・楮（こうぞ）（紙の材料）」の事。
18	文違	ひじかい	八街市。八街町史によると、天正11年（1583年）小間子吉田の原の戦いに敗れた椎崎城主の椎崎三郎勝任が再起を図るべく援軍を頼みに先発隊を飯櫃（いびつ）村（旧芝山町）の山室山城主の陣屋に派遣したところ、先発隊が道を間違えて飯櫃（いいびつ）村（酒々井町）に向かってしまい、当地で間違いに気が着いたと言い、道を間違えたことから「ふみちがえ」と称し、その後転化して「ひじかい」となった。
19	用草	もちくさ	八街市。かなり古くからある地名で、「もちくさ」とか「持草」とも書いた。中世は白井荘の内、神宮寺に残された記録では、貞治2年（1363年）に秀尊が白井荘用草で大般若経を書写している。地名の由来は、地形として「もち（川の崖）・くさ（腐）」で、川がけ下の湿地という意味と思われる。

20	鹿放ヶ丘	ろっぽうがおか	四街道市。この地区が江戸時代以降「六方野」と称していた事と、六方野から小金野にかけて、鹿狩りが行われていた事にちなむ。 鹿放（ろっぽう）ではどうかとの提案があり、中心地の大日権現岡の岡から囲みのない丘が採用されて「鹿放ヶ丘」と命名された。
21	南波佐間	なばさま	四街道市。地名の由来は「千葉家盛衰記」によると、文明10年（1478年）、千葉輔胤の寺崎城に対し、寄手の山内上杉は陣屋を山梨村に、扇谷上杉は上野村に築き、総大将として陣を引いた上杉朝定を「南波様」と称し、それが転化してこの地が「南波佐間」となったが、なぜかは不明。
22	廿五里	ついへいじ	市原市。戦国時代は「津比地」（つひじ）、江戸期には「津以比地」（ついひじ）、「廿五里」とも、露乾地（つゆひじ）とも書いた。 江戸期は廿五里村。低地のため、養老川洪水の被害を度々被るため移転する事二度三度は普通であったため、昔は「漂流常なり」との伝説があった。地名の由来は、鎌倉から25里の地にあった事にちなむ当為伝承があるが未詳。また、源頼朝がこの地の東泉寺にあった縫仏（刺しゅうの仏像）を崇敬していたが靈異を起こした為、これを治めるため毎月焼香の使いをよこした。その距離が25里であったという。「す（洲）・ひじ（泥地）」の転化で、養老川の運んできた土砂の堆積地で、泥湿地という意味。他にも諸説がある。
23	海士有木	あまありき	市原市。明治7年（1874年）に起立。もとは海士村と有木村が合併した。海士村は海辺・海とも書く。古代海士族と関係があるともいわれ、「あま」とつく地形は水辺（川・海）の崩壊した丘陵などを言う。「あば（奪）・み（水）」の転化で、水辺の地崩れ地という意味。 有木（蟻木）の地名は、戦国期からあり、戦国期末期二階堂實綱の居城の蟻木城が語源か。他にも、長谷寺のご本尊を作った稀代の靈木がある」という意味で「有木」にしたという説もある。
24	新生	あらおい	市原市。里伝によれば、文禄年間（1592年～1590年）は新生郷と称し、のちに糸久・権現堂・十五沢を分村した。地名の由来は、「あら（荒）・う（～になっている場所）」の転化で、新たに土砂崩れで崩壊地となった所という意味。
25	分目	わんめ	市原市。地名の由来は、「わけ（分村した子村のこと）・め（間）」で分村した子村と親村の間に位置する事にちなむ。
26	飯給	いたぶ	市原市。地名の由来は、この地の天智天皇の皇子・大友皇子が逃亡してきた際に、村人が食べ物を差し上げた。そのお礼にと皇子が「飯給」という地名を授けたという説と、同じ内容で日本武尊という説や「イビタ（木漣子）の転化で、常緑低木のある場所を指すという説がある。「いた（痛）・ふ（生）」で崩壊地という意味。
27	不入斗	いりやまず	市原市。地名の由来は、免税地という意味で、貴族の荘園や寺社領などで貢納を免除された土地や未開拓地であったため、貢納が困難であった土地など諸説ある。
28	新妻	にっつま	成田市。根木名側の古名は新妻川で、そこから付いたか。

29	馬乗里	まじょうり	成田市。地名の由来は、古からの馬の産地であり、馬に関する名前という説もあるが、「ま（接続詞）・しほ（萎）・り（里）」で雨などにより浸食され次第に削られて行く地形などの地形語と思われる。
30	取香	とっこう	成田市。古代東国の蝦夷を捕らえてトリコ（俘人の意味）として収容した地であるという説と、「鳥飼部」が居住した説がある。「とり（崩壊地）・か（処）」のされた転化で、川により浸食された地勢を指す。
31	冬父	とぶ	成田市。江戸時代は冬父村。地名の由来は、山が崩れる事を「トブ」というので、崩壊または浸食地形ではないかと思われる。また、アイヌ語で竹をトブという事から、その転化で「竹の繁茂した地という意味か。
32	酒々井	しすい	印旛郡。地名の由来は、親孝行の息子が毎日働いて父親に酒を買っていったが、ある時酒を買うお金が出来ず家に帰る途中お酒の匂いのする井戸があり、その井戸の水を汲んで父親に飲ませたら、とてもうまい酒と喜ばれたという伝説から着いた地名。
33	四箇	しか	印旛郡。地名の由来は、埴生郡大竹村をはじめ4ヶ村によって開発された事による地名。江戸期は「布鎌四箇村新田」（ふかましかわらしんでん）で、寛文6年（1666年）に開発された15村の一つ。
34	稲荷木	とうかぎ	市川市。地名の由来は、稲を干す木の「稲木」からついた地名。
35	国府台	こうのだい	市川市。地名の由来は、景行天皇の子である日本武尊が東夷を征伐し、その帰路に市川に浅瀬を探していると、どこからとなく一羽の白鳥が浅瀬に降り立ち、丘に翼を休めていた。それを見た日本武尊は大変喜び、この地を「鵜の台」と名付けたという。下総国の国府が置かれていた地からも付いたとも。
36	北方町	ぼっけまち	市川市。地名の由来は、崖の意味である「ほき」が転化して「ぼっけ」となった。当地に住んでいた閉院家の呼び名が北家（ほっけ）であったから。
37	猫実	ねこざね	浦安市。地名の由来は、鎌倉時代の天津波で大きな被害を受けた集落の人達が、豊受神社付近に堅固な堤防を築き、その上に大きな松の木を植え、今後はこの松の根を波浪が越さないように願ったことから「根越さね」と言われた。それがいつしか「猫実」と称されるようになったという。
38	木下	きおろし	印西市。地名の由来は、竹袋村から木材を利根川におろしていた事から付いたという。
39	発作	ほっさく	印西市。地名の由来は、「新開地」という意味で、「発作」とされた。手賀沼の東南部の平坦地で、寛文11年（1671年）に江戸町人の手で手賀沼の新田開発が始まったが、かなり難航したという。
40	草深	そうふけ	印西市。手賀沼と印旛沼に囲まれた台地上の地で、江戸期は「惣深」と書いていた。
41	将藍	しょうげん	印西市。地名の由来は、この地方の開拓者の名前から付けられたと言われ、「将監川」の名前もこの地名から採用された。
42	案食ト杭	あじきぼっくい	印西市。地名の由来は、「仁平元年たび重なる水害で飢えた人々が五

			穀神を祀って駒形神社を創建したところ、翌年大豊作となり、以降食に安ずるようになった事にちなむ。(佐倉風土記)「ト杭(ぼっくい)は「棒杭」の事で「ト」はカタカナの「ト」ではなく、トウ(占う)と言う意味です。この地は沼地で、それを長い棒杭を協会に打ち込み、土盛りをして耕作できるように開拓したという。
43	神々廻	ししば	白井市。江戸時代の初めにはこの地名はあり、「神々迫」と書いていた。読みも(シシバサマ)でした。地名の由来は、17紀以前のこの地域の村名を示した古文書に「志しはさま」と言う表記があり、東西南北の四方向、四至に細長い谷津の狭間がある環境を表現したものか。また「しし(猪)の狩場があったなどの説がある。
44	都部	いちぶ	我孫子市。地名の由来は、「一の分け」と言う事で、余郷(あまりべ)を意味する。この余郷(余戸ともいう)とは、古代日本の律令制度の行政組織として国・郡・郷(里)があったが、通常50戸で1郷単位で決めていたが、それを超える戸を余郷(余戸)と言った。
45	日秀	ひびり	我孫子市。地名の由来は、かつては「日出(ひいで)村」と称した。平将門の死後、その魂が手賀沼を超えてこの地の大地に上り朝日を拝した事に由来する。
46	逆井	さかさい	柏市。地名の由来は、「井戸を逆さにしたように水が良く湧き出る場所」と言う説と、不動様の水がまるで逆さまにしたように生きよよく出ていたからと言う説がある。
47	十余二	とよふた	柏市。地名の由来は、明治初年、広大な小金牧の開墾が進む中で生まれた地名。入植地の12番目の意味で「十二分の発展を未来に賭けてつけられた。
48	三ヶ月	みこぜ	松戸市。地名の由来は、鎌倉時代この地に城館を築いた千葉氏の家紋に三ヶ月が含まれていたのが由来と言う。中世から「ミコツキ」・「ミコツイ」と呼ばれ、のちに転嫁して「ミコゼ」と変化した。
49	五香	ごこう	松戸市。地名の由来は、小金牧及び佐倉牧の開墾が行われ、開墾地の入植順番に「初富・二和・三咲・豊四季・五香・六実・七栄・八街・九美上と言う地名がつけられた。
50	名都借	なづかり	流山市。地名の由来は、地元では「天武天皇の皇子の末裔が関東に下り、現在地に借りの都を置くとした事から「名都借」と言われた。

千葉県内の難読地名50選

千葉県北東部編

1	行内	ぎょうじ	旭市。元飯岡町。江戸期は行内村。集落は西国漁師の進出により台地縁辺から海岸部に移転している。地名の由来は「行」は元は「垢」で「がけ(坂)・ふち(ふち)」の転訛で丘陵端部の崖沿いの地勢を指したものか。または「くだり(行)」と読み「くだり(下)」で同様の意味か、または「ひら(行)」の読みで傾斜地と言う意味の「ひら(平)は。元が「桁(かた)」であったなら「きだ(刻)・ふち
---	----	------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

			(縁)」の転訛で浸食された崖沿いの地著言う意味に利用した事による。
2	高生	たかおい	旭市。元海上町。江戸期は高生村。寛文10年(1670年)に始まる樺海の干拓によって成立した18村の一つ。当初は後草村が親村だった。地名の由来は、「たき(滝)・おい(老い)」の転訛で、風化して崩れやすい崖・急傾斜地・浸食地と言う意味か。または「たき・おい(負い)」で背後に崖を背負った地と言う意味か。
3	萬歳	まんざい	旭市。元千潟村。江戸期は萬歳村。寛文年間(1661~1673)から樺海の新田開発によって成立、もと上代村下。地名の由来は、佳字を充てた瑞祥地名。
4	狝野	むじなの	旭市。元飯岡町。昭和29年頃に起立。もとは三川村三川の一部。地名の由来は、ムジナ(あなぐま)が生息していた事によるとも。詳細は不詳。
5	郡	こおり	神埼町。もと香取郡神崎村の一部。
6	谷三倉	さくみくら	多古町。江戸期は谷三倉村。三倉村の枝郷、地名の由来は、「さこ(狭い処)・み(水)・くら(削る)」の転訛で、三治部の浸食地にある砂礫地、または降雨時の浸水被害地と言う意味。
7	十余三	とよみ	多古町。明治5年(1872年)に起立。もとは江戸期の佐倉七牧のうち矢作牧に属す。地名の由来は、近代になり新政府が旧下総牧の開墾事業を進めた際、13番目に開墾された事による。
8	南借当	みなみかりあて	多古町。「かしあて」とも言い、手とも書いた。江戸期は南借当村。北中村の枝郷とも。地名の由来は、「膳夫(かしわて)」の子孫がいたことによるともいう。「かしわ(傾)・て(方向)」の転訛で蛇行河川に囲まれた地崩れした所と言う意味。
9	青馬	おうま	東庄町。「おおま」とも。江戸期は青馬村。地名の由来は、もと郡郷と小南郷の「合間」にあった事から「合間村」と称したが、東六郎が玉子大明神に奉納した青馬を死後「合間の駒ヶ野」に葬った事から青馬と呼ぶようになったという。
10	羽計	はばかり	東庄町。江戸期は羽計村。羽斗とも書く。元禄年間頃(1688~1704)まで郡村と称し、石出村、今郡村、谷津村、鹿戸村、新宿村を枝郷とした。中世の郡郷の中心地にあたる。西方には桁沼を開拓した平坦地が広がる、地名の由来は、「はば(崖)・かり(崖)」で二重の崖地と言う意味。
11	八重穂	やえぼ	東庄町。江戸期は八重穂村。地名の由来は、旧樺海開拓の結果新田立村された際、栗野村支村として栗の豊作を祝して名付けられた。
12	返田	かやた	香取市。元佐原市。「かえた」とも。鎌倉期・江戸期は坂田村。地名の由来は「かや(崩壊地形)・た(処)」で過去に地すべりなどによる崩壊地を指したものの。
13	神生	かんのう	香取市。元山田町。神尾とも。江戸期は神生村。地名の由来は、加納あるいは神野の転訛と言う。「かむ(噛む)・の(野)・う(~になっているところ)」で浸食された山麓沿いの傾斜している所と言う意味

14	桐谷	きりざく	香取市。元山田町。江戸期は桐谷村、地名の由来は「きり(切)・さく(狭処)」で山間の谷間を指したもの。
15	九美上	くみあげ	香取市。佐倉七牧の一つで、9番目に開墾されたので「九」の美称の日に上をつけて「九美上」となったという。
16	公官洲	こうかんず	香取市。元佐原市。公官州とも言う。江戸期は公官州新田。承応2年(1653年)上戸村出身の七老兵衛が起立したと伝えられる新田。
17	筭島	こうがいじま	香取市。元佐原市。明治22年(1889年)に起立。筭州とも書く利根川の中州を開墾した新開発地であり、由来は不明。
18	石納	こくのう	香取市。元佐原市。江戸期は石納村。地名の由来は、石代納(年貢を米で納める代わりに通貨で納めること)にちなむか。
19	鳥羽	とっば	香取市。元佐原市。江戸期は鳥羽村。地名の由来は「とり(浸食)・つば(潰)」の変化で浸食地を強調したものか。または「とり(浸食)は(端)」で浸食された丘陵の奥地にある地勢を指したものか。
20	新部	にっぺ	香取市。元佐原市。新辺とも書く。鎌倉期・江戸期は新部村。地名の由来は「にい(新)・べ(辺)」の転訛で新しく出来た川辺と言う意味。利根川の流路が変動する以前は「川辺」であったと思われる。
21	仁良	にら	香取市。元山田町。室町期は仁良郷、江戸期は仁良村。地名の由来は「にた(湿地)」の転訛で湿地と言う意味。または「に(粘土)・ら(接続後)」で、土器を作るための粘土層の土が採れた処か。
22	丁子	ようろご	香取市。元佐原市。丁古とも書く。鎌倉期は丁古村。江戸期は丁子村。地名の由来は、香取神宮祭に神輿昇丁(みこしかきちょう・神輿を担ぐ人)を出す事にちなむと言う。「丁」の字は古代朝鮮語のヨボに由来し、本来の若者の意味から満20歳になる壮丁の呼称に転じ、これに接続語の子を付けたもので、天皇の棺を担ぐ京都八瀬童子の興丁(ヨチヨ)と同じ。「はつ(削)・ろ(袋状に入り込んだ地形)」と言う
23	龍谷	りゅうさく	香取市。元小見川町。江戸期は竜谷村。内野村野枝郷。地名の由来は「りゅう(土砂災害)・さき(谷)」で、土石流などの災害があった谷と言う意味。
24	分郷	わかれごう	香取市。元小見川町。江戸期は分郷村。下小堀村の枝郷。地名の由来は下小堀から分村した事にちなむ。
25	飯櫃	いびつ	芝山町。戦国期に飯櫃の地名があった。江戸期は飯櫃村。地名の由来は「うえ(上)・ひつ(棺)」の転訛で、地すべりのあった高所と言う意味。
26	小原子	おばらく	芝山町。江戸期は小原子村。地名の由来は「おば(崖地)・く(処)」の転訛で崖地という意味か。
27	於畿	おき	横芝光町。旧横芝町。江戸期は於畿村。中世坂田城主・井田因幡守の滅亡後、家臣が帰農し坂田郷を形成。後に6村に分損した内の一つで坂田を冠称していた。地名の由来は「うぎ(浸食)」の転訛で浸食地と言う意味。
28	尾垂	おだれ	横芝光町。旧光町。江戸期は尾垂村。天正年間(1573~1592)寛朝大僧正が勅命により成田山新勝寺本尊不動明王像を護持し尾

			垂ヶ浜に上陸したと言う伝承がある。地名の由来は「お（接続詞）・たら（緩傾斜地）」で緩やかな傾斜地を指した者か。また、伝承によれば印旛沼の龍伝説の龍が天に上がった祭、天から尾が垂れていた地である事から「尾垂」になったと言う。
29	小堤	おんづみ	横芝光町。旧横芝町。江戸期は小堤村。中世坂田城主・井田因幡守の滅亡後、家臣が帰農し坂田郷を形成。後に6村に分村した内の一つで坂田を冠称していた。地名の由来は「お（接続語）・つつ（包）・み（水）」の転訛で川に囲まれた地と言う意味。
30	曾根合	そねあい	横芝光町。旧横芝町。戦国期に曾根合に地名はあった。江戸期は曾根合村。中世坂田城主、井田因幡守の滅亡後、家臣が帰農し坂田郷を形成。のちに6村に分村した内の一つで、坂田を冠称していた。地名の由来は「そね（水害地名）・あい（間）」で丘陵と川の間にある氾濫原地帯の砂礫地で洪水時に伏せ流水が湧き出す事もある地と言う意味
31	取立	とりたて	横芝光町。旧横芝町。江戸期は取立村。中世坂田城主・井田因幡守の滅亡後、家臣が帰農し坂田郷を形成。のちに6村に分村した内の一つで坂田を冠称していた。伝承によれば最初の坂田城主であった三谷氏は当地に倉庫を造り、のちに井田氏が守る所となったという。地名の由来は「とり（取）・たて（縦）」で、南北に伸びた崩壊・地すべりなどの浸食地と言う意味。
32	鳥喰上	とりはみかみ	横芝光町。旧横芝村。戦国期に「鳥はみの郷」があった。江戸期は鳥喰上村。もとは鳥喰村1村であったが天正19年（1591年）に鳥喰上村・鳥喰下村が分村、元禄年中（1688～1704）に当村から鳥喰新田が分村した。当地には鳥喰沼があったが明治45年（1912年）に干拓工事が始まり全部が水田となり、形跡を止めていない地名の由来は、「とり（取）・くえ（喰）」の転訛で、土地が浸食され削られているという意味。または往時鶴が多く群棲していて、これを将軍に献上していたと言い、地名は将軍より賜ったとも伝えられる。
33	母子	ははこ	横芝光町。旧光町。江戸期は母子村。地名の由来は中世横須賀城主・小積が敗戦し妻子が船で逃れた際、当地で転覆し亡くなったので子安神社が祀られた事にちなむと言う。「はば（崖）・こ（処）」の転訛で崖地を指したものの。
34	傍示戸	ほうじど	横芝光町。旧光町。江戸期は祝示戸村。地名の由来は、上総・下総両国の境界を示す表示があった事にちなむ。
35	宝米	ほうめ	横芝光町。旧光町。「ほうめい」とも。江戸期は宝米村。地名の由来は「奉免」の転訛で、官物・雑事などの賦課を免除された地。
36	虫生	むしょう	横芝光町。旧光町。江戸期は虫生村。地名の由来は「むし（筆）・う（～担っている処）」の転訛で崩壊地を指したものの。
37	生尾	おいお	匝瑳市。元八日市場市。江戸期は生尾村。地名の由来は、昔当地を訪れた者が尻尾のない白馬に乗り通りかかった際、一夜のうちに尾が生えたので「生尾」と名付けたという。「おい（老い）・お（尾根）」で浸食された丘陵が風化している所と言う意味。

38	蕉里	かぶざと	匝瑳市。元八日市場市。江戸期は蕉里村。地名の由来は「かぶ(傾)・さと(集落)」の転訛で、傾斜地の集落と言う意味。
39	栢田	かやだ	匝瑳市。元野栄町。江戸期は栢田村。江戸後期に東西に分村、明治9年(1876年)に一村に戻る。地名の由来は「かや(曲)・た(処)で、大布川の蛇行地点に位置することによる。
40	川向	かわむかい	匝瑳市。元八日市場市。川迎とも。江戸期は川向村。地名の由来は、地域内を流れる川に面している事にちなむ。
41	新	しむら	匝瑳市。元八日市場市。江戸期は新村。地名の由来は「しんむら(新村)」の転訛で、新しく出来た村を指したのか。「しも(下)むら(村)」の略で、台地先端地を下と見立てての地名か。
42	城下	ねごや	匝瑳市。元八日市場市。成立年代、由来等は不詳。
43	八辺	やっぺ	匝瑳市。元八日市場市。矢部とも書く。江戸期は八辺村。地名の由来は、平安期の山上郷(やまのべのごう)の遺称地ともいう。「山上」は「山」・の(接続語)・ベ(辺)で山沿いの地方と言う意味。「矢部」は「や(谷津)・ベ(辺)」で湿地になっている所と言う意味
44	海鹿島町	あしかじまちょう	銚子市。昭和9年(1934年)に起立。元は銚子市飯沼の一部。地名の由来は附近に海鹿島がある事にちなむ。海鹿島と言う名称は海鹿が訪れておいた事から名づけられた。
45	犬吠埼	いぬぼうさき	銚子市。犬吠埼の地名の由来は、源義経の愛犬が銚子市大岩で主を慕い、吠えた声が聞こえた事から名付けられたと言われる。「いぬ(崖)・ぼう(そそけ立つような崖の浸食地形)・さき(岬)」で急傾斜で浸食された崖のある岬と言う意味。
46	垣根見晴台	かきねみはらしだい	銚子市。昭和13年(1938年)に起立。もとは銚子市垣根の一部で山林の無住地域であった。地名の由来は垣根長者の垣にちなむとも、かつて蠣を多く産出した事によるとも伝わる。「かき(蠣)・ね(川岸)」で、利根川に川岸が削られていく浸食地の意味。または「かき(欠き)・ね(麓)」で崩壊した急傾斜の麓の地を言う。
47	唐子町	からこちょう	銚子市。昭和9年(1934年)に起立。もとは銚子市大字口・ハの一部。地名の由来は、唐の舟が難破し、その子供が当地に住み着いたと言う伝説にちなむ。
48	後飯町	ごはんちょう	銚子市。昭和9年(1934年)に起立。もとは銚子市飯沼の一部。地名の由来は、飯沼観音の後ろ側に位置する事によると言う。
49	外川町	とかわちょう	銚子市。昭和13年に起立。もとは銚子市高神の一部。古くは戸川と書いた。地名の由来は、川にさしかかる所と言う意味。
50	諸持町	もろもちちょう	銚子市。江戸期は諸持村。地名の由来は「もろ(脆い)・もち(傾斜地)で、崩れやすい傾斜地を指したものの。

1	天面	あまつら	鴨川市。江戸期は天面村。天津良村とも書く。地名の由来は、県内の「あま」と付く地形は水辺（川・海）の側の崩壊した丘陵または山となっている事から、「あば（奪）・み（水）・つら（連）」の転訛で、水辺の地崩れ地が連なった所と言う意味か。
2	打墨	うつつみ	鴨川市。鎌倉期に打墨の地名があった。江戸期は打墨村。江戸初期に上打墨村、中打墨村・下打墨村に分村。地名の由来は「うつ（空）・虚）・つみ（障）」で山ひだに囲まれたうつろな地溝帯を指したものととも。「うす（憂）・み（水）」の転訛で、崩壊しやすい崖のある川と言う意味か。
3	貝渚	かいですか	鴨川市。戦国期は「かいですか村」、江戸期は貝渚村。地名の由来は「かい（峡）・すか（洲処）」で谷間の砂州と言う意味。
4	金束	こづか	鴨川市。江戸期は小束村。金塚とも書く。地名の由来は「かな（崩壊）・たばね（束）」の転訛で、崩壊地と言う意味。里見氏の埋蔵金に関係するとの説もある。
5	主基西	すきにし	神川氏。昭和50年（1975年）に起立。元は鴨川市西の一部。地名の「主基」は明治天皇が大嘗祭を行った時に北小町村字仲の坪に主基斎田が選ばれた事にちなむ。大嘗祭には悠紀濟田と主基斎田の二か所が選定される。悠紀は聖域の意味、主基は副の意味。
6	北風原	ならいはら	鴨川市。南北朝期に奈良井原の地名があった。江戸期は北風原村。元和2年（1616年）横尾村から分村。地名の由来は「なら（山間部の緩傾斜地）・い（川）・はら（原）」で、緩く傾斜している川沿いの平地と言う意味。
7	滑谷	ぬかりや	鴨川市。江戸期は滑谷村。地名の由来は「ぬかり（湿地）・や（谷津）」で、湿地と言う意味。
8	横渚	よこすか	鴨川市。江戸期は横渚村。地名の由来は「よこ（東西の方向）・すか（洲処）」で、東西に広がる砂洲と言う意味。
9	四方木	よもぎ	鴨川市。江戸期は四方木村。もとは蓬菜（よもぎ）であったのをのちに改めたという。地名の由来は「え（手足）・もぎ（挽ぎ）」の転訛で土地の崩壊を指したものと。
10	来秀	らいしゅう	鴨川市。江戸期は来秀村。地名の由来は「くり（扶）・ほ（山頂）」の転訛で、山頂付近が崩れた事を指したものと。
11	出水	いでみず	勝浦市。明治22年（1889年）に起立。元は新宮村組替地字出水地名の由来は、湧水地から付いた。
12	鶺原	うばら	勝浦市。江戸期は鶺原村。宇原・卯原とも書いた。地名の由来は、鶺が多く生息していた説と荊（いばら）の繁茂する地の転訛と言う説がある。「うし（憂）・はら（原）」の転訛で、浸食により崩落していく危険な崖のある平らで広い土地を指したものと。
13	興津	おきつ	勝浦市。古くは置津・奥津・澳津とも書いた。平安期は興津郷、戦国期は興津の地名があった。江戸期は興津村。地名の由来は古くは内陸

			から見て海寄りの地を「沖」と呼んだ事による。「津」は港の意味。
14	墨名	とな	勝浦市。江戸期は墨名村。江戸初期に新宮郷から独立して成立。地名の由来は、上古この地に春部直黒生黄（はるべあたえくろうめ）と言う者が居た事から「黒」生黄の「土」地である「名」田が短縮して「くろとな」となり、それが変化したという説と、黒土の浦の略と言う説がある。「と（山）・な（土地）」で山のある地と言う意味。
15	部原	へばら	勝浦市。明治初年に新宮郷が当村・新宮村・沢倉村に分村。地名の由来は日本武尊の東征時に悪蛇を退治し蛇原と称したのが部原に転訛したもの。「へ（辺）・はら（原）」で海辺の広い土地と言う意味。
16	法花	ほうげ	勝浦市。古くは法華と書いた。江戸期は法花村。地名の由来は「ほき」の転訛で急斜面や地すべり崩壊地を指したものの。
17	実谷	みたに（じっこく）	勝浦市。地名の由来は、3つの谷の合流点と言う意味か。
18	行川	なめがわ	いすみ市。元夷隅町。江戸期は行川村。地名の由来は「なめ（滑）・かわ（川）」で、川底が滑る川と言う意味。
19	日在	ひあり	いすみ市。元大原町。戦国期に「ヒアリ」の地名があった。江戸期は日在村。日有村とも。地名の由来は、紀伊国日高の字体くずれで、紀伊・和泉などの上方漁民の移住を裏付けるものとの説がある。また、昔貴人がこの地を通った時、まだ太陽が在ると言った事が地名の由来となったという説もある。「ひび（輝）・あり（有）」で亀裂（浸食による谷）のある土地と言う意味か。
20	弥正	やまさ	いすみ市。元夷隅町。岩将・岩間狭・岩正とも書いた。地名の由来は「いわ（岩）・ま（間）・さ（狭）」で、岩の多い狭い土地と言う意味
21	宇筒原	うどうばら	大多喜町。「うどばら」とも。宇登原・宇藤原とも書く。江戸期は宇筒原村。板谷村の枝郷。地名の由来は「うち（打）・はら（原）」の転訛で、地すべりしてできた以前よりはなだらかな広い土地を指す。
22	小土呂	おどろ	大多喜町。江戸期は小土呂村。「小土呂七軒百姓」の名が残り、永保年間（1081～1084）には民家が7軒だったという。地内の小土呂坂は大多喜藩主・本多忠朝が大阪夏の陣出陣の際に切り開いたもの。地名の由来は「おと（落）・りょう（掠）」の転訛で地すべり地で土石流もあった所か。または棘（おどろ）で雑草や茨の生い茂った土地を指したもののか。
23	面白	おもじろ	大多喜町。江戸期は面白村。筒森村の枝郷。地名の由来は、塗料に使う白土が採れた事にちなむとする説と、古代に天から下って来た神々が戯れ遊んで「おもしろい土地」と言った事に由来するという説がある。「おもて（崩壊地形）・しる（湿地）」の転訛で、崩壊しやすい崖の側の湿地と言う意味。
24	新丁	しんまち	大多喜町。江戸期は新町。大多喜城下町の一つで、江戸期は根小屋、明治5年（1872年）から大多喜を冠称。明治初年（1868年）に銭神松村を合併。地名の由来は本多忠勝が城下町設置の際、近隣の洲軽田をあげて移住した事から命名されたとも。また、新しく出来や町と言う意味。

25	部田	へた	大多喜町。江戸期は部田村。里伝によると慶安年間（1648～1652）山中郷より分村という。地名の由来は「へ（辺）・た（処）」で川沿いの地を指したものの。
26	百鉢	もほこ	大多喜町。「むほこ」とも。江戸期は百鉢村。笛倉村。地名の由来は「もも（河川沿岸の崖地）・ほこ（崖地・不安定な土地）」の転訛で崩れやすい河岸の崖地を指したもののか。「もも・ふこ」だと河岸の地すべり危険地という意味。
27	市野々	いちのの	長南町。市之野とも。南北朝期に一野村があった。江戸期は市野々村地名の由来は「いつ（巖）・の（接続詞）・の（野）」の転訛で、険しい山の麓にある傾斜地という意味。
28	小生田	おぶた	長南町。南北朝期に小蓋村があった。江戸期は小生田村。地名の由来は、和名抄に小田郷がある事から小田の転訛ともいわれるが、「おぶ（負う）・た（処）」で山などを背にした地という意味。
29	給田	きゅうでん	長南町。江戸期は給田村。地名の由来は、中世荘園の給田に由来するか。あるいは寺社に供された田地「給田」の転訛か。
30	地引	じびき	長南町。江戸期は地引村。里伝によればもとは八坂村といい、八坂に転じ、いつしか地引になったという。寺家村とも称すともいう。地名の由来は「八坂」は板の多い事を指す地名。「や（ハ）・いた（痛）」で小規模な崖崩れや洪水が多々あった事に指す。「地引」は地滑りなどが発生した事にちなむか。村名が変わった理由とも考えられる。
31	米満	よねみち	長南町。江戸期は米満村。地名の由来は「よな（砂）・みち（いっぱいになる）」の転訛で、三途川が運ぶ土砂が堆積する事を指したものの
32	刑部	おさかべ	長柄町。平安期、鎌倉期は刑部郷。江戸期は刑部村。地名の由来は「お（接続語）・さか（坂）・べ（辺）」で傾斜地の附近という意味。
33	国府里	こうり	長柄町。江戸期は国府里村。地名の由来は「こおり（郡）で古代の長柄郡家（こおりのみやけ）所在地ともいわれている。または「こ（接続語）・おり（降り）」で、地すべり地を指したもののか。
34	鴉谷	とうや	長柄町。室町期に鴉谷の地名があった。江戸期は鴉谷村。地名の由来は「とうし（倒し）・や（谷津）」の転訛で、崩れる危険のある崖地の側の湿地という意味。
35	味庄	みしょう	長柄町。江戸期は味庄村。地名の由来は、初め御庄と書き、隣接する船木と合わせて船木を産する御庄であった事によるという。中世の三崎荘を指した名称か。
36	山根	やまんね	長柄町。戦国期は山根郷。江戸期は山根村。地名の由来は、山の麓という意味。
37	力丸	りきまる	長柄町。江戸期は力丸村。地名の由来は「ち（場所）・から（高くなった所）・まる（運ぶ）」の転訛で崩壊地を指したもののか。
38	朝生原	あそうばら	市原市。麻生原とも書く。江戸期は朝生原村。久留里城主里見義堯の娘、種姫の夫であった正木久太郎が討死となった事から、当地の宝林寺に入り後世を弔ったと言う。地名の由来は「あさ（崖崩れ・湿地）・う（～なった処）・はら（原）」で、崩れるような崖のある山間

			の平坦地という意味。
39	外部田	とのべた	市原市。江戸期は外部田村。地名の由来は「と（山）・の（接続語）・へた（辺処）」で、丘陵沿いの土地を意味する。
40	櫃挾	ひつば	市原市。江戸期は櫃挾村。櫃狭村とも書く。里伝によれば櫃挾間であったという。地名の由来は「ひ（ひび割れ）・つば（崖）」でひび割れたような狭い谷のある崖地という。
41	潤井戸	うるいど	市原市。江戸期は潤井戸村。「和名抄」の湿津の遺称と考えられる。地名の由来は「うるい（湿）・つ（津）」で、湧泉地を指すのもので「つ」が「と（処）」に転訛したものと考えられる。当地の南の水神谷から、豊かで清く澄んだ地下水が湧き出していた事に由来する。
42	大厩	おおまや	市原市。大馬屋とも書く。江戸期は大馬屋村。地名の由来は「おお（美称）・まま（崖）・や（谷）」の転訛で崖のある傾斜地という意味
43	小田部	おだっぺ	市原市。江戸期は小田部村。地名の由来は、古くは小田辺と書き、田の辺の集落が所在した事による。「おだ（砂地）・べ（辺）」の転訛で、砂地の周辺という意味。
44	神代	かじろ	市原市。梶路とも書く。戦国期は梶路郷、江戸期は神代村。里伝によれば、村は古来の神地で神代の神が鎮座した当初は23戸だけだったという。貞観10年（868年）に従五位上を授けられた神代神社があり、地名の由来も神社にちなむと思われる。「神代」は「かくみ・こうしろ」とも読み、神田と同義と言われている。古来は「かわらい」とよみ、祝詞では「かみやらい」と読まれる。また「かじ（搔）・しろ（湿地）」の転訛で、過去の土石流の堆積地や崖の崩壊地のある湿地という意味か。
45	武士	たけし	市原市。建市・武子・竹子とも書く。江戸期は武士村。地名の由来は当地に鎮座している建市神社にちなむという。建市神社を祀ったのは古代民族の高市氏（たけちし）と言われており、当地に移住し祖霊を祀ったと言い、地名となった。「たき（滝）・ち（処）」で、崖地・急傾斜地・浸食地を指したものか。または「たき（滝）・し（浸食地・冠水地）」の転訛で、崖地・急傾斜地・浸食地」で冠水しやすい土地を指したものか。
46	大曾根	おぞね	袖ヶ浦市。もと小曾根と書いた。江戸期は小曾根村。明治8年（1875年）に改称。地名の由来は「お（接続語）・そね（川沿いの氾濫原地帯の砂礫地または旧河川流路跡）」で水害地名。
47	三箇	さんが	袖ヶ浦市。江戸期は三箇村。地名の由来は、御霊台・松崎台・塚越の3村が合併した事による。
48	百目木	とうめき	袖ヶ浦市。古くは道米木・道目木とも書いた。江戸期は百目木村。地名の由来は、川音などがはっきりと聞こえる土地を指したもの。
49	堂谷	どうや	袖ヶ浦市。江戸期は堂谷村。地名の由来は「どう（百目木のどう）・やつ（谷津）」で、百目木と隣接する事から元は百目木の一部であり百目木の湿地という意味か。または川音まどがはっきりと聞こえる湿地という意味か。

50	三黒	みくろ	袖ヶ浦市。江戸期は三黒村。地名は弟橘姫の遺骸が畔戸の浜に漂着したので、日本武尊が遺骸をこの地に運び葬らせたのでこの地を「御骸（みくろ）」と呼んでいたが、のちに「三黒」と改められたという。「み（接続語）・くろ（割）」で、川の氾濫などで浸食された地を指したのか。
----	----	-----	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

千葉県内の難読地名50選 千葉県外房編

1	実門	さねかど	山武市。旧山武町。江戸期は実門村。地名の由来は「さ（美称）・ぬか（湿地）・ど（処）」の転訛で、湿地という意味か。
2	新泉	にいのみ	山武市。旧成東町。江戸期は新泉村。地名の由来は「にい（新居）・の（助詞）・み（水）」で、新しく開墾して出来た集落を意味する。
3	引越	ひっこし	山武市。旧成東町。元は旧松尾町引越で江戸期は引越村。地名の由来は、他の土地から自然災害などの理由で移住してきた事を表したのか。
4	武勝	むしょう	山武市。旧山武町。江戸期は武勝村。地名の由来は、苧麻（からむしで麻のこと）が繁茂する土地を意味する苧生（むしふ）の転訛だという。「むし（筆る）・う（～になった処）」で崩壊地という意味。
5	埴谷	はにや	山武市。旧山武町。半谷、埴屋とも書く。平安期は埴谷郷があった。江戸期は埴谷村。里伝によれば、元は埴屋と称したが埴谷とした。のちに横田村・奥渡村・実門村・小原村・諸木村・仲代村・寺ヶ台の7村が分村し半谷と称した。文禄11年（1602年）に奥渡・小原・諸木・寺ヶ台の4村を合併し埴谷に戻した。地名の由来は「はに（粘土）・や（谷津）」で、粘土の採れる湿地という意味。
6	粟生	あお	九十九里町。古くは禾生・粟尾と書いた。平安期は禾生郷、室町期は粟宇郷、江戸期は粟生村。当時は上・下粟生村に分かれていた。地名の由来は、湿地という意味。
7	不動堂	ふどうどう	九十九里町。江戸期は不動堂村。地名の由来は、治承4年（1180年）の石橋山の合戦に敗れた源頼朝が当地に来て村名を訪ねた際、御堂を問われたと誤解した里人が「不動堂」と答えた事に由来する。
8	家之子	いえのこ	東金市。江戸期は家之子村。地名の由来は、当地に護良親王の娘（または妃）・華蔵姫（けぞうひめ）が家臣と共に逃れ住んだ場所との言い伝えがあり、姫の御所を「宮家の子御所」・「家の子御所」と呼んだことから名付けられたという伝説がある。「やの（谷野）・ね（麓）」の転訛で、谷からの水による地すべり地形の麓という意味。
9	砂古瀬	いさごぜ	東金市。江戸期は砂古瀬村。砂子瀬・砂小瀬とも書く。地名の由来は南白亀川の浅瀬沿いの砂地という意味。
10	一之袋	いちのふくろ	東金市。江戸期は一之袋村。枝郷は二之袋村。地名の由来は「いち（一）・の（接続語）・ひくど（低処）」の転訛で、一番目に開拓下低湿地という意味か。「ふくろ」は越水した場合水が溜まりやすい地でもある。

11	家徳	かたく	東金市。江戸期は家徳村。享保年間（1716～1736）に幕府領の塚崎野が新田開発されて成立。地名は始め北塚新田と称したが、開発者・家徳屋佐藤次郎佐衛門の嘆願により家徳村と称したという。
12	上武射田	かみむぎた	東金市。「かみむしやだ」とも。江戸期は上武射田村。古来は御厨であった。地名の由来は「古事記」に記載のある牟邪臣（むぎのおみ・武社の国を治める役人の官職）に由来する。「みぎ（剥）・すだ（洲処）の転訛で、川の洪水時に削られた土地が堆積している地という意味か。日本武尊が東征の際、一行は安房の方から船でやってきたが、難破したため家来がこの地に住み着いたという伝承がある。
13	求名	ぐみょう	東金市。室町期には郡名郷、江戸期は求名村。地名の由来は、家康が東金に滞在中、村人から地名の命名を依頼され、即座に「求名」と名付けたという。
14	士農田	しのだ	東金市。昭和21年（1888年）に起立。もとは豊成飛行場跡地。地名の由来は、第二次大戦後、飛行場勤務の軍人が帰農し開拓した事にちなむ。
15	酒蔵	しゅぞう	東金市。江戸期は酒蔵村。伝承によれば上総介平広常滅亡後、その家臣数名が土着し村を起こしたという。地名の由来は「さけ（割け）・くら（崖）」の転訛で、谷によって割かれた崖地という意味。
16	薄島	すすきしま	東金市。江戸期は薄島村。地名の由来は「すすき（芒）・しま（土地）で、軟弱な土地という意味。
17	丹尾	たんのお	東金市。戦国期は丹尾之郷。江戸期は丹尾村。地名の由来は「にう（丹生）」の転訛で、赤色を得る赤土の山地という意味。または「たお」の変化で古語たわ（撓）で、断層地形を指したもののか。
18	台方	だいかた	東金市。江戸期は台方村。地名の由来は台地のある方という意味。
19	殿廻	とのまわり	東金市。江戸期は殿廻村。地名の由来は、平将門にちなむ館をとりまく地の意味によるともいう。「たな（棚）・まわり（廻）」で棚状地の周辺という意味。
20	道庭	どうにわ	東金市。古くは道場とも堂庭とも書いた。江戸期は道庭村。地名の由来は「みち（地すべり）・にわ（仕事をする平らな地）」の転訛で、崩れた地を開墾した平地という意味。
21	大豆谷	まめざく	東金市。江戸期は大豆谷村。大豆作村とも。地名の由来は「まま（崖）・さく（谷津）」の転訛で、崖のある湿地という意味。
22	三ヶ尻	みかじり	東金市。江戸期は三ヶ尻村。地名の由来は「み（水）・か（接続語）・しり（端）」で川沿いの地という意味か。東鑑に鞆（しりがい）の地名があり、植草・酒蔵・三ヶ尻の総名という説があるが、鞆が郷名とすれば郷のうちで「川のある端の地」という意味か。
23	御門	みかど	東金市。古くは帝と書き、のち三門とも書いた。中古は十文字領。十文字領は旧宮村・三浦名村・御門村・高倉村・東中村・田中荒生村であった。江戸期は御門村。地名の由来は、平将門の御内墓地であった事によると伝わる。「み（水）・か（接続語）・と（処）」で、川沿いの地を指したもののか。

24	砂田	いさごだ	大網白里市。江戸期は砂田村。地名の由来は「いさご（砂）・だ（処）で、砂地路という意味。
25	神房	かんぼう	大網白里市。江戸期は神房村。もとは長柄郡の神房村（現茂原市榎神房）と1村であったと思われる。地名の由来は、日本武尊が子ノ神社に館を造り滞在されたので「神房」というようになったという。「かん（嚙）・ぼう（崖の浸食地形）」で、崖の浸食地という意味。
26	経田	きょうでん	大網白里市。江戸期は経田村。京田とも書く。京田とは荘園地名の一種か、あるいは寺社に供された田地（給田）の転訛か。
27	下ヶ傍示	さげぼうじ	大網白里市。江戸期は下ヶ傍示村。地名の由来は、境界を示す傍示があった事に由来する。「さか（避け）・ぼう（浸食地）・し（場所）」で、南白亀川により土地が浸食された地という意味。
28	四天木	してんぎ	大網白里市。江戸期は四天木村。地名の由来は、古くは四大天王像が漂着したので「四天寄」と称した事に由来するという。「よもぎ」の転訛で、崩壊地という意味か。
29	餅木	もちのぎ	大網白里市。江戸期は餅木村。当地は神亀4年（726年）鎮守府將軍・大野東人が土気金城を築き、餅ノ木・金谷・南玉・池田は土気と共にその柵内五郎を成した地と伝える。「もち（小さな盆地）・の（接続語）・き（処）」で、小さな盆地地形で洪水の浸水しやすい処という意味。
30	九十根	くじゅうね	大網白里市。江戸期は九十根村。地名の由来は「くし（崩れ）・ふね（川端）」の転訛で、崩れやすい川沿いの地という意味。
31	国府関	こうぜき	茂原市。江戸期は国府関村。地名の由来は「たき（高）・さき（崎）」の転訛で、傾斜地の前の地という意味か。
32	押日	おしび	茂原市。江戸期は押日村。地名の由来は、真名を通った日本武尊がこの地訪れた時、ちょうど陽が沈もうとしたので「惜しい日だ」と申された事から「惜日」と名付けられたが、後に転訛し「押日」となったという。「おし（決壊地）・ひ（水路）」で、洪水で水害のあった地という意味か。
33	小轡	こぐつわ	茂原市。江戸期は新小轡村。里伝によれば寛永年中（1624～1644）に本小轡村の野地を開墾して出来た新田で、寛文年間（1661～1673）に分村。地名の由来は、田村麻呂が村人から献上された轡（くつわ）を「良き轡」とほめたが、間違って「粗末な轡」の意で「小轡」と名付けた野ではないかという説と、頼朝が馬を繋いだ事に由来するとの説がある。「こ（接続語）・くつ（崩）・は（端）」の転訛で崩壊地の周りという意味か。
34	猿袋	さるぶくろ	茂原市。江戸期は猿袋村。地名の由来は「さる（地すべり）・ぶくろ（袋）」で、河川が蛇行した袋状の地形で水が溜まり易い地すべり地という意味。
35	道表	どうびょう	茂原市。成立年代不詳。もと茂原字金谷町・昌平町の一部、高師字桂川・高瀬・茂原・正路川・高師・酒盛塚と石川向・川中島の一部。地名の由来は高師にあった小字をそのまま採ったもので、同地には藤

			原黒麻呂の墓があると言われている道標山があり、地名の由来という
36	七渡	ななわたり	茂原市。江戸期は七渡村。地名の由来は、かつて当地は道が入り組んでおり村人は何度も道を渡って目的地に向かわなければならなかった事によるという。「なな(斜)・わだ(曲)」の転訛で、傾斜した河川の湾曲部にある湿地という意味。
37	真名	まんな	茂原市。江戸期は真名村。地名の由来は、日本武尊が東征の際この地を通り休息した折り、村人が献上した水が非常においしかったので「これ天の真井なり」と申された事から「真井(まない)」となり転訛して「まんな」となり「真名」の字があてられたという。武尊に献上した水は東前の堰の上にある「タンタン前の清水」ではないかという説がある。「まな(接続語)・い(川)」で一宮川を指したのか。
38	御蔵芝	みくらしば	茂原市。江戸期は御蔵芝村。地名の由来は、古くは「芝」であったが戦国時代の土気城主・酒井定隆がここに農産物を収納する倉庫を立てたので「御蔵芝」に名を改めたという。また村人が芝だけでは物足りないので「御蔵芝」と改めたともいう。「しば」は河川沿いで大洪水に冠水する所を指す。
39	野牛	やぎゅう	茂原市。江戸期は野牛村。地名の由来は、天平の頃(729~749)、加賀国から牛を連れて来た人が移住して、牛を放牧して村を形成したという伝説にちなむという。「の(野)・うし(憂し)」で、洪水などの水害に見舞われる不安定な山麓の広い傾斜下平地の意味。
40	弓渡	ゆみわたし	茂原市。江戸期は弓渡村。地名の由来は、伝説によると源頼朝が赤目川にさしかかった時、援軍の武将千葉常胤に弓を渡したことにちなむという。「ゆ(揺)・み(水)・わた(曲)」で、洪水で水があふれる川の湾曲部を指したのか。
41	鷺巣	わしのす	茂原市。南北朝期に鷺栖の地名があった。江戸期は鷺巣村。文永元年(1264年)の開拓という。地名の由来は、氏神である鷺神社にちなむという。「わし(鷺神社)・の(接続語)・す(砂洲)」で鷺神社の側の砂洲を指したのか。
42	北日当	きたひなた	白子町。江戸期は北日当村。もとは南日当と一村であったか。寛政5年の村明細帳によると水早損に難儀する悪米場所で土地は砂地であると記されている。地名の由来は「ひび(輝割れ)・なた(鉦)」の転訛で、土地を南白亀川が輝のように流れる急傾斜地を指したのか。
43	剃金	そりがね	白子町。江戸期は剃金村。曾利金とも書いた。地名の由来は「そり(長方形の土地)かね(曲)」で、南白亀川の流路が曲がっている部分に位置する長方形の地という意味。
44	八斗	はつと	白子町。江戸期は八斗村。延宝元年(1673年)に大八斗村・小八斗村の呼称があった。天保年間(1830~1844)までに小八斗村新田を分村。地名の由来は、郷社白子神社のご神体の伝承から初登(はつと)と称したが、後に転訛して八斗になったという。「はり(懇)・と(処)」の転訛で開墾した地という意味。
45	古所	ふるところ	白子町。江戸期は古所村。地名の由来は「ふる(崩壊地形)・ところ

			(小高い場所)」で南白亀川により削られた地にある小高い場所という意味。
46	北水口	きたみよぐち	長生村。江戸期は北水口村。古くは妙口村と称した。慶長年間(1596~1615)以降、佐瀬一族が名主役を名乗り開拓したと伝える地名の由来は「みお(漕)・くち(入口)」の転訛で、湿地の入口という意味。
47	一松	ひとつまつ	長生村。昭和28年に起立。元は一松村。江戸期は一ツ松村。一ツ松郷ともいう。地名の由来は「いつ(巖)・まで(曲所)」の転訛で、一宮川に曲流により土地が削られる地という意味。
48	船頭給	せんどうきゅう	一宮町。昭和29年に起立。もとは長生村一松の一部。江戸期は一ツ松村の分郷村22村のうち船頭給の地域。地名の由来は荘園制時代の職人給田の名称が残ったもの。
49	東浪見	とらみ	一宮町。虎見とも書く。戦国期は虎見之郷。江戸期は東浪見村。枝郷に新熊村・下谷村があったが、のちに合併。地名の由来は「どろ(泥)・み(水)」の転訛で、沖合いに砂泥が堆積し泥海の名が生じたという。
50	本給	ほんきゅう	一宮町。成立年代は不詳。地名の由来は荘園制時代の給田の名が残ったもので、免田・給田と区別するために「本給田」と称したのが略されたものか。

千葉県内の難読地名 50 選

千葉県南部編

1	安布里	あぶり	館山市。安布理村とも書く。江戸期は安布里村。地名の由来は「雨降り」の略で、雨乞いに関係しているという。「あぶ(剥げ崩れる急傾斜地)・り(集落)」で、過去に地すべりなどの自然災害のあった所にある集落という意味。
2	出野尾	いでのお	館山市。江戸期は出野尾村。地名の由来は「いで(出)・の(接続語)・お(尾根)」で、突き出した山の尾根という意味。
3	神余	かなまり	館山市。戦国期は神余郷。江戸期は神余村。地名の由来は神戸郷の余戸が住んだ事によるという。「かみ(上)・あば(奪う)・り(里)」で、丘陵が崩壊した地の集落という意味か。
4	上真倉	かみさなぐら	館山市。実倉とも書く。戦国期は実倉の地名があった。江戸期は上真倉村。もとは真倉村。地名の由来は「さ(狭)・ね(根)・くら(崩壊地)」で、崩壊した山麓の狭い地という意味か。
5	見物	けんぶつ	館山市。江戸期は見物村。地名の由来は「み(水)・もり(盛)・の(野)が(みもの)が「けんぶつ」と変化したか、海と山に囲まれた地勢を指したのものか。
6	香	こうやつ	館山市。江戸期は香村。地名の由来は古代に塩海郷賀宝里(しおみのごうかほのり)と呼ばれていて「賀宝」の読みが変化して「香こう」になったという。「たき(高)・やつ(谷津)」の転訛で、急傾斜地のある湿地という意味。

7	坂足	さかだる	館山市。江戸期は坂足村。酒足村とも書く。地名の由来は「さか（傾斜地）・だる（切り立った崖）」で断崖のある地という意味。
8	布良	めら	館山市。江戸期は布良村。地名の由来は海藻が繁茂する浦の意味の「布浦（めうら）」が転訛したとする説と、紀伊国の目良（めら）あるいは伊豆国の妻良（むら）の住人の移住地にちなむとする説、天富命が阿波の忌部を率いて当地に上陸した際、土民が献上した布を「良い布」と賞したことにちなむという伝承がある。「まえ（前）・ら（場所）」で安房神社の前の地という意味か。
9	山萩	やもおぎ	館山市。江戸期は山萩村。地名の由来は「やま（山）・うぎ（崩壊地形）」の転訛で、山崩れした所という意味。
10	丹生	にゅう	南房総市。元富浦町。江戸期は丹生村。地名の由来は、丹土（辰砂しんしゃ・硫化水銀を含む鉱物）を生産した事にちなむ製鉄関連地名。
11	久枝	くし	南房総市。元富山町。江戸期は久枝村。地名の由来は、道が崖上の地を越えていく所を指す。
12	検儀谷	けぎや	南房総市。元富山町。昭和30年に起立。元は岩井町検儀谷原。江戸期は検儀谷原村。地名の由来は「くき（山）・や（谷津）・はら（原）」の転訛で、地すべり地の平らで広い湿地という意味。
13	平久里下	へぐりぐも	南房総市。元富山町。江戸期は平久里下村。江戸初期に平久里村が当村と平久里中村に分村して成立。「へぐ（剥ぐ）・り（接続語）」で、地すべり発生地を指したのか。
14	御子神	みこがみ	南房総市。元丸山町。江戸期は御子神村。地名の由来は、村域にある王子神社（日本武尊）の皇子を祀る）にちなむ。または「み（水）・こ（処）・がみ（上）」で、沼沢地のある高くなっている所という意味
15	礎森	するすもり	南房総市。元和田町。江戸期は礎森村。地名の由来は、源頼朝の愛馬「麿墨」の誕生地という伝承があり、地名も擦れにちなむという。「す（砂）・うす（地すべり）・もり（盛）」の転訛で、山崩れの砂が堆積した事を指したのか。
16	仁我浦	にがうら	南房総市。元和田町。江戸期は仁我浦村。地名の由来は「にが（琢）・うら（方向・場所・水辺）」で、川の氾濫や降雨時には土地が地すべりする地という意味。
17	真浦	もうら	南房総市。元和田町。江戸期は真浦村。往古は西白渚村・布野村と一村であったという。地名の由来は「ま（崖）・うら（方向・場所）」の転訛で、地すべりする場所という意味か。「ま（接続語）・うら（入江）」で、古代は入江であったことによる筈。古代の鍛冶部である「天津真浦」に由来するとも言い、地内にある真浦神社の階段の中ほどにある大岩は「古開岩（こまらいわ）」といい、鍛冶神・天津麻羅が宿る磐座で真浦鍛冶で知られた鍛冶屋たちの信仰する氏神だという。この事から「真浦」は「麻羅」の転訛とも考えられる。
18	白渚	しらすか	南房総市。元和田町。江戸期は東白渚村。川谷村から分村。明治4年（1871年）に西白渚村を合併。西白渚村は江戸後期に成立した新村で、真浦村から分村。地名の由来は「ひら（傾斜地）・すか（洲

			処)」の転訛で、傾斜している砂洲という意味。
19	海発	かいはつ	南房総市。元丸山町・和田町。「かいほつ」ともいう。江戸期は開発村地名の由来は「かいほつ」なら「開発」で「開拓地」を意味する地名「かい(狭)・は(端)・つ(津)」の転訛で、谷間の端の港という意味か。
20	安馬谷	あんばや	南房総市。元丸山町。通称「あんべえ」という。江戸期は安馬谷村。源頼朝にこの地区の人々が馬の鞍馬を献上した事から付いた地名だという。「あば(地崩れ型の崖)・や(谷)」で、崩壊地の傾斜地という意味。
21	平館	へだて	南房総市。元千倉町。江戸期は平館村。地名の由来は「ひら(傾斜地)・だて(南北の方向)」の転訛で、南北に延びた崖地のある傾斜地という意味か。または「へだ(辺処)・て(手)」で、海辺の地の方という意味か。
22	葱戸	こっと	南房総市。元千倉町。江戸期は葱戸村。地名の由来は「こじ(抉)・と(処)」の転訛で、浸食地を指す。
23	千代	せんだい	南房総市。元三芳村。千台・仙台とも書く。江戸期は千代村。付近は俗に千代っ原と呼ばれる平地。地名の由来の「千代」はもとは「川内」で「かわ(川)・うち(淵)」の転訛したものか。川沿いの地という意味。また源頼朝がこの地で馬50騎を得て「我が家千代(ちよ)の栄をなさん」と言った事から「千代(ちよ)」と名付けられ、のちに「千代(せんだい)に変じたともいう。
24	本織	もとおり	南房総市。元三芳村。本折とも書く。江戸期は本織村。地名の由来は「もと(側)・おり(降)」で、土砂が流れてきた所の側という意味か
25	大帷子	おおかたびら	鋸南町。江戸期は大帷子村。地名の由来は「おお(美称)・かた(片)ひら(平)」で、片側が山になっている急傾斜地という意味。
26	大崩	おくずれ	鋸南町。江戸期は大崩村。「おお(美称)・くずれ(崩れ)」で、崩壊地という意味。過去に土砂災害があったか。
27	宇藤原	うとうばら	富津市。江戸期は宇藤原村。地名の由来は「うち(打)・はら(原)」の転訛で、地すべりして出来た以前よりはなだらかで広い土地を指したものか。
28	売津	うるつ	富津市。江戸期は売津村。地名の由来は、古代の雨露郷(うるふのごう)の違称地と推定される。「うる(潤)・ふ(^になつた所)」の転訛で、湿地という意味。
29	海良	かいら	富津市。江戸期は海良村。地名の由来は「かい(狭)・ら(場所を示す接続語)」で、谷間の地という意味。
30	小志駒	こじこま	富津市。江戸期は小志駒村。明治7年(1874年)に岩井作村を合併。地名の由来は「こじ(抉じ)・こま(屈)」で、志駒川に浸食された決壊常襲地という意味か。
31	桜井総稱 鬼泪山	さくらいそうし ようきなだやま	富津市。成立年代不詳。江戸期は鬼泪山村。明治22年(1889年)に鬼泪となり、昭和初期に桜井に編入されたとみられる。地名の由来は「鬼泪」は日本武尊が東征の際、阿久瑠王と戦ったが、阿久瑠

			王が涙を流して謝った事から「鬼泪山」と名付けられたという。
32	望井	もちい	富津市。江戸期は望井村。地名の由来は「もち（傾斜地）・い（川）」で、川沿いの傾斜地という意味。
33	豊英	とよふさ	君津市。明治10年（1877年）に起立。前身は倉沢村・奥畑村。豊英の地名は豊かになる事を願った瑞称地名。倉沢村は江戸期からあった。地名の由来は、当村開発の恩人・里見倉沢の名にちなむ。奥畑村は江戸期からあり、由来は山奥の端の意味。
34	平田	ひらった	君津市。江戸期は平田村。寛永9年（1632年）に植畑村により分村。「ひら（接続語）・た（処）」で、傾斜地という意味。
35	釜生	かもう	君津市。江戸期は釜生村。地名の由来は「かま（噛ま）・う（^になっている所）」の転訛で、浸食による崩壊地になっている所という意味。
36	怒田	ぬだ	君津市。古くは沼田と書いた。江戸期は怒田村。初めは日出と称したまた泥田（ぬかりだ）村とも称した。「ぬ（沼地）・た（処）」で、湿地という意味。「ひので」は当地が東に位置する事から、太陽の日の出の方向である事によるか。
37	芋窪	いもくぼ	君津市。江戸期は芋窪村。栗坪村枝郷。里伝によると昔は迎（向）郷と称していたという。地名の由来は「いも（傾斜地の滑落土の堆積地名）・くぼ（埋められた窪み）」を傾斜地の地すべり地帯を指したもの
38	久留里	くるり	君津市。古くは来里・玖留離とも書いた。戦国期には久留里の地名があった。地名の由来は平将門の三男頼胤が細田妙見参詣の際、城は浦田山に築き、久しくこの里に留まるべしとの御託宣があった古事に由来するという。「くる（削る）・り（里）」で、崩壊地の集落という意味。または、鹿野山に近い事から、阿久瑠王の支配地であった事の名残りか。
39	尾車	びしゃ	君津市。江戸期は尾車村。地名の由来は古くから毘沙門天が祀られ信仰を集めた事にちなむという。「ひじ（泥）・や（谷津）」の転訛で、泥土の湿地を指したもののか。
40	草牛	そうぎゅう	君津市。江戸期は草牛村。神野寺領は惣久村、他を草久村と書いた。地名の由来は「くさ（臭）・うし（憂し）」の変化で、草が腐るような水気の多い地すべり崩壊地という意味。
41	六手	むて	君津市。江戸期は六手村。地名の由来は日本武尊と当地の豪族阿久瑠王との戦いで、阿久瑠王の部下の手が切られ、それが6つ流れ着いた事に由来するという。「む（湿地）・て（方向）」で、湿地の方という意味か。当地は阿久瑠王の出生地で別名六手王とも称したと言い、首を埋めたという阿久瑠塚があったという。
42	三直	みのう	君津市。平安期に三直郷（みなほのごう）、南北朝に三直郷、江戸期に三直村があった。地名の由来は「み（水）・なほ（直）」で、川が真っ直ぐ流れる地を指すか。または「み（美称）・なお（直）」で、山の高い所という意味か。あるいは「み（水）・の（野）・う（~になっている所）」で、水の多い山麓の傾斜地という意味か。

43	杓師	もくし	君津市。古くは杓師・木工師とも書いた。地名の由来は「ま（接続語）・くし（扶）」の転訛で、浸食地という意味。
44	常代	とこしろ	君津市。江戸期は常代村。常城村とも書く。地名の由来は当地に鎮座する常代神社にちなむという説がある。同社は「とこよ」と読み、地名も「とこよ」であったと思われる。「ところ（処）」の転訛で、小高い場所という意味。
45	皿引	さらひき	君津市。江戸期は皿引村。地名の由来は日本武尊が東征の際、当地の豪族阿久瑠王は敗戦、血を引きながら帰ったため皿引村と称したが、これが変化して皿引になったという。「さら（曝）・ひき（低い）」の転訛で、地すべりの低地という意味か。
46	畔戸	くろと	木更津市。明治9年（1867年）に起立。江戸期は久津間新田。葛間新田とも書く。更科日記に出てくる「くろとの浜」の比定地。地名の由来は古代の郷名・倉戸によるか、または当地辺りを黒戸浜と読んでいた事にちなむか。「くら（崩）・と（処）」で、土砂が堆積して出来た地形を指したものの、または「くる（転）」で、海岸の廻った所の意味か。または「くろ（削る）」で、浸食危険地という意味か。
47	下内橋	げないばし	木更津市。江戸期は下内橋村。明治7年（1874年）に二階堂村を合併。当村錯綜地は現袖ヶ浦市下内橋錯綜となる。地名の由来は「しも（下）・ふち（淵）・はし（端）」の転訛で、川端の地という意味。
48	請西	じょうざい	木更津市。戦国期に請西の地名があった。江戸期は請西村。戊辰戦争時に旧幕府軍にて活躍した請西藩主・林忠宗は当地を治めていた。地名の由来は城在・城砦と伝える。
49	菅生	すごう	木更津市。鎌倉期は菅生荘、江戸期は菅生村。同地には平家の武人・景清の伝説が残る。地名の由来は「すご（浸食地）・う（^になっている所）」で、河川の曲流部で水が当たって浸食する所を指したものの。
50	真里谷	まりやつ	木更津市。南北朝期は真里谷郷。真理谷・真理ヶ谷・丸ヶ谷・毬谷とも。地名の由来は「ま（接続語）・くり（崩壊地形）・やつ（谷津）」の転訛で、崩れ易い崖の側の湿地という意味。



NO	地名	読み方	由来
1	旅籠町	はたごまち	千代田区・由来は、旅籠が数多く立ち並んでいたもので着いた地名。
2	日本橋 馬喰町	にほんばし ばくろうちょう	中央区・由来は、馬市が立ち、牛や馬の売買や治療を行う博労（ばくろう）が多く住んでいた事に由来する。
3	檜物町	ひものちょう	中央区・由来はこの町に「絵物師」が多く住んでいた事による。「絵物」とは、ヒノキや松、サワラなどの薄い板を曲げて作る「曲げ物」の事で、これらは食器や勝手用品として欠かせないものでした。
4	蓬莱橋	ほうらいばし	中央区・由来は、「農は里の宝、向こうの山は宝の山、皆で力を合わせ宝の山を切り開けよ」と語り、対岸に架けられた橋が宝へと続く架け橋である事から「蓬莱橋」と名付けられたという。橋の長さが897, 4mで数字の語呂合わせが「やくなし」という事に由来し、縁起の良い橋とされています。
5	榎町	まきまち	中央区・由来は、かつては江戸城の近くにあった町で、徳川家康が城

			の周囲を固め目隠しのため、堀に沿って「まき」の木が植えられていた事に由来する。現在は八重洲という地名に代わっている。
6	薬研堀	げんぼり	中央区・由来は、薬研は舟形の容器と車輪状の碑器具で薬種をすり潰す道具のこと。江戸時代、墨田川から幕府の藏へ引き込まれていた堀と容器の断面が同じV字型だった事に由来する。
7	麻布 狸穴町	あざぶ みあなちょう	新宿区・由来は、「アナグマ」がすむ穴があった事に由来する説と、採鉱坑の間歩（まぶ）がなまって付いた説がある。
8	霞岳	かすみがおか	新宿区・由来は、古くは「霞村」と呼ばれていた。この地域にあった「霞の松」という古木が、青木氏との境界の目印であった可能性や、朝霧がよく立つ地形であった事に由来という。
9	十二社	じゅうにそう	新宿区・由来は、応永年間（1328年～1428年）に中野長者と呼ばれた鈴木九朗が、故郷である紀州熊野の12所権現の神々をこの地に祀った事に由来する。
10	角苜	つのはず	新宿区・由来は、この地を開拓した渡辺与兵衛の髪束ね方が、角や矢苜（弓の矢の弦をかける部分）のように見えた為、人々が彼を「角髪」または「矢苜」と呼び、これが転じて「角苜」となったという。
11	筑土 八幡町	つくど はちまんちょう	新宿区・由来は、町内にある筑土八幡神社に由来する。この神社は、嵯峨天皇の時代に八幡神を信仰する翁（おきな）の夢に神霊が現れ、松の木に白鳩がとまった事が起源という。筑土の由来は、伝教大師（最澄）が神像を彫刻し祀った際、筑紫の宇佐の宮土を礎とした事から「筑土八幡神社」と名付けられた。
12	改代町	かいたいちょう	新宿区・由来は、元は牛込村の一部で、江戸時代初期の慶長期（1696年～1615年）に江戸城の整備が行われた際、稚子橋周辺の住民がこの地に移転してきた。その部（承応3年（1654年）にこの沼地を代替地として与えられ、住民がゴミなどを捨て埋め立て、宅地化したので「改代町」と呼ばれるようになった。
13	駕籠町	かごまち	文京区・由来は、江戸時代に將軍の駕籠を担ぐ「御駕籠の者」51人が居住していた事に由来する。この地は元禄10年（1697年）に彼らに与えられ「巢鴨駕籠町」と呼ばれていた。
14	指谷	さしがや	文京区・由来は、徳川三代將軍家光が鷹狩りの際に、現在の文京区白山周辺の谷地を指し「いずれ人が住むようになるだろう」と話した事に由来する。
15	真砂坂	まさごさか	文京区・文京区にある真砂坂の正式名称は「東富阪」です。元々は「鳶坂（とびさか）」と呼ばれていた。後に「富阪」と変化した。「真砂」という地名は、明治2年（1869年）に「本郷真光寺門前」と古庵屋敷が合併して「本郷真砂町」が起立した際に名付けられた。これは、古今和歌集の歌にある「浜の真砂」のように、町の限りない繁栄を願う意味が込められている。
16	大和郷	やまとむら	文京区・かつてこの地にあった六義園が大和郡山藩の藩邸として使用されていた事に由来する。
17	厩橋	うまやばし	台東区・由来は、江戸時代にこの場所の西岸に幕府の馬小屋（厩）が

			あった事に由来する。
18	御徒町	おかちまち	台東区・由来は、江戸時代に将軍の護衛などを担う「御徒（おかち）」と呼ばれる下級武士立が集まって住んでいた事に由来する。 彼らは騎乗を許されず、徒歩で警護に当たっていた。
19	吾孀	あずま	墨田区・由来は、吾孀神社に由来し、その名は日本武尊（やまとたけるのみこと）の妻である「弟橘姫」（おとたちばなひめ）を忍んで発した言葉「吾孀者耶」（あずまはや）に由来する。言葉の意味は「ああ、我が妻よ、恋しい」という意味です。
20	請地	うけじ	墨田区・由来は、中世の荘園制の時代に地頭の管理地「請地」だった事からだとか、湿地帯の「浮き地」であった事に由来する。
21	業平	なりひら	墨田区・由来は、平安時代の歌人である「在原業平」がこの地を訪れ、歌を詠んだことに由来する「業平塚」や「業平天神」があった事に起因する。
22	亀戸	かめいど	江東区・由来には諸説ありますが主なものは、かつてこの地が亀の形に似た島（亀島）と呼ばれ、後に「亀村」となり、村にあった「亀ヶ井」という井戸と合わさって「亀井戸」となり、後に「亀戸」となった。
23	東雲	しののめ	江東区・由来は、夜明けの東の空が明るくなる様子に由来している。古くから和歌などで使われている。
24	碑文谷	ひもんや	目黒区・由来には諸説あり、有力な説は、碑文谷神社に保存されている「碑文石」に刻まれた梵字が起源という説で、他に「檜物屋」で鎌倉・室町時代から檜（ひのき）の薄板で器を作る職人（檜物師）がいた説などがある。
25	不入斗	いりやまず	大田区・由来は、かつて税を治める義務が免除されていた土地（免祖地）であった事に由来する説と、「入山瀬」（いりやませ）が転じたもので、谷の入口にある集落を指すという説もある。
26	糶谷	こうじや	大田区・由来は、鎌倉時代にこの地域で糶（こうじ）を製造していた事に由来する。「糶」は、米にコウジカビが繁殖する様子が花が咲くように見える事から、日本で作られた国字で、この地域で農業の傍ら糶を造る人々がいた事から付いた地名。
27	粕谷	かすや	世田谷区・由来は、二つの説があり、一つは鎌倉時代にこの地に住んでいた豪族「糟谷三郎兼時」に由来する説と、もう一つは洪水などで上流から流れて来た土砂が堆積して出来た土地を指すという説がある
28	砧	きぬた	世田谷区・由来は、古代に布を柔らかくするために使われた道具である「砧」に由来する。「砧」は多摩川流域に住んでいた渡来人が、麻やからむしの皮を水にさらしながら「砧」で打って布目をつぶし柔らかくし、光沢出す役割がある。
29	駒繫	こまつなぎ	世田谷区・由来は、平安時代後期の文治5年（1189年）に、源頼朝が奥州の藤原康衡を討伐するためこの地を訪れた。その際先祖である源義家が先勝祈願をした古事に従い、頼朝も愛馬を境内の松につないで戦勝を祈願した「駒繫ぎの松」が「駒繫」という地名になった。

30	等々力	とどろき	世田谷区・由来は、等々力溪谷の滝の音が「轟く」事になる説と、戦国時代の「兎々呂城」(とどろじょう)が変化したという説もある。
31	廻沢	めぐりさわ	世田谷区・由来は、村の四方に川の流れがあった事や、渦巻く湧き水があった事に由来する。
32	厩道	うまやみち	渋谷区・由来は、幕府の米蔵へ米を運ぶための馬が飼育されていた場所があったことが起源という。
33	忍川橋	おしかわばし	杉並区・由来については不明。
34	豊島	としま	豊島区・由来は、かつてこの地域に東京湾が深く入り込み、多くの島々が存在した事に由来する。
35	雑司ヶ谷	ぞうしがや	豊島区・由来は諸説あり、南北朝時代に宮中の下級役人であった雑色(ぞうしき)の職にあったものが、この地に土着した事に由来する説と、寺社の雑司料説(寺社の経済を支える領地)があった説、曹司説(郡領などの身分ある人の子孫を指す曹司)がこの地を始めた説など
36	姥橋	うばがばし	北区・由来は、かつて石神井川の支流の稲付川に架かっていた橋の名前が由来ですが、誤って子供を落として死なせてしまった乳母が、自責の念から身を投じたという伝承に由来する。
37	日暮里	にっぽり	荒川区・由来は、江戸時代に桜やツツジが美しく、「一日中過ごしても飽きない里」という意味の「日暮しの里」に由来する。寛延2年(1749年)に正式な地名となった。
38	小豆沢	あずさわ	板橋区・由来には諸説あり、平将門が運んでいた小豆(あずき)が沢に流れ着いたという伝説や、飢餓の際に小豆が流れ込み赤飯を奉納したという説、また地形的な特徴のある崖(アズ)に由来する説がある
39	小樽	こぐれ	練馬区・由来には諸説あり、主な説は「樽(くれ)」が神木や山出しの木材を意味し、それに美称の「コ」を付けたという説と、古代朝鮮からの渡来者に関係する高句麗(こくり)に由来する説がある。
40	石神井	しゃくじい	練馬区・由来は、昔この地で井戸を掘った際に発見された石の剣(または石の棒)を、村人たちが「石上様」として祀った事に由来する
41	乗漕	のりぬま	練馬区・由来には諸説あり、主なものは水辺と馬に関する説で、「馬の放牧地の近くの沼地」や「馬が水辺で休息する場所」などがある。
42	前原	まいっばら	練馬区・東京都では「前原」という地名は見当たらないが、船橋市前原の由来は、飯山満(はさま)という地域から見て「前面にある広い野原であった事に由来する」という説がある。
43	興野	おきの	足立区・由来は諸説ありますが、主な説は江戸時代の開拓期に「奥野」と表記されたものが転訛して「興野」になったという説がある。
44	舎人	とねり	葛飾区・由来に諸説あり、聖徳太子が身分を隠して関東地方巡行していた時、聖徳太子だと正体を見破った唯一の人物が舎人の役職者だった為、この地名を舎人と命名した説や、舎人親王(天武天皇の皇子)に由来する説、舎人が住んでいた説がある。舎人とは、古代宮中に仕え警備や雑用などを行う役人。
45	鹿骨	ししばね	江戸川区・由来は、奈良時代に鹿島神宮から奈良の春日大社へ向かう途中で神鹿がこの地で亡くなり、手厚く葬られた事に由来する。

46	谷河内	やごうち	江戸川区・由来は、「谷川の内側にある湿地」や「沼沢（しょうたく）」に由来する。かつてこの地域は沼地でした。
47	興宮町	おきのみやちょう	江戸川区・由来は、「沖宮神社」に由来し、この神社が海に面していた事から「沖の宮」と呼ばれたことが起源。
48	押越	おっこし	八王子市・由来については不明。
49	上柚木	かみゆぎ	八王子市・由来は、かつてこの地域が「柚木郷」と呼ばれていた事に由来する。「柚木」の語源は、柚子の木が多かった事に由来する
50	桐田町	くにぎたまち	八王子市・由来は、中世にこの地に居を構え、「桐田氏」を名乗った横山党の一族に由来する。
51	廿里町	とどりまち	八王子市・由来には諸説あり、「下長房村の小字・小名であった十十里（とどり）に由来する」説と、「鎌倉から20里（約80km）の距離にあった事に由来する説がある。漢字の「廿」は「二十」の意味。
52	鍵水	やりみず	八王子市・由来は、大栗川に源流部に位置し、湧き水が豊富だった為、槍のように尖らせた竹筒を岩盤に打ち込んで飲料水を得る方法を「ヤリミズ」と呼んでいた事に由来する。
53	摺差	するさし	八王子市・由来は、焼き畑が行われていた場所に由来する。
54	登々	とど	八王子市・由来については不明。
55	堀合	ほりあわい	三鷹市・由来については不明ですが、地形的な特徴から付いた地名と思われる。
56	牟礼	むれ	三鷹市・この地名は日本各地に存在するが、古代朝鮮語で「山」を意味する言葉に由来する。
57	師岡町	もろおかちょう	青梅市・由来は、明治7年（1874年）に上師岡村と下師岡村が合併し「師岡村」となり、昭和26年に青梅市発足時に師岡町となった
58	蜷沢	えびさわ	青梅市・由来についてははっきりしませんが、「蜷」は通常「しじみ」と読みますが、この地名では「えび」と読ませる理由は不明。しじみがたくさん採れる沢と思われる。
59	高土戸	たかっと	青梅市・由来については不明。
60	極指	きわさす	青梅市・由来については不明。
61	蚕種石	こたねいし	町田市・由来は、養蚕業の繁栄を祈願して祀られた「蚕種石」という石に由来する。
62	暖沢前	ぬくざわまえ	町田市・由来ははっきりしませんが、かつてこの地域に「暖かな沢」があり、その「前」に位置したので付いた地名と思われる。
63	奈良林	ならばい	町田市・「奈良林谷戸」という地名は、町田市北部に位置し、雑木林に入り込んだ里地を指す。
64	清田谷	せいだや	町田市・由来は、「清らかな水や田畑が広がっている地域」
65	馬場窪	ばんばくぼ	町田市・「馬場」という地名は、馬を飼育したり、馬術の訓練を行ったりする場所を示唆し、「窪」は地形的に「くぼ地」や「谷地」を指す事で、水源地や湧水源を意味する。
66	松下谷戸	しょうかやと	町田市・松下谷戸という地名由来ははっきりしませんが、「谷戸」という言葉は「丘陵地が浸食されて形成された谷状の地形」をいう。「谷戸」の初出は「常陸国風土記」とされ「夜刀」と表記され、後に

			「谷戸や谷津」、「谷」一文字で「やと」と記されるようになった。
67	竜沢	りゅうたく	町田市・由来には諸説あり、一つは旗本柳沢氏の所領であった事から「柳沢」を音読みして「りゅうたく」となったという説と、「サワ」が水の流れる森のある場所を指し「タキ」（龍から想像される）が切り立った険しい崖を意味する事から、崖地で大雨の際に激しく水が流れた事が由来という。
68	結道	ゆいどう	町田市・由来に付いては不明。
69	内裏谷戸	だいりやと	町田市・内裏という言葉は、江戸時代末期に京都の内裏から移り住んだ能楽師がこの地にいたという伝承に由来する。
70	貫井南町	ぬくいだみなみ ちょう	小平市・「貫井」という地名の由来は、江戸時代に開発された村で、「温井」とも書かれ、かつてこの地にあった湧水池が比較的高温であった事に由来する。北町と南町に分かれていた。
71	百草	もぐさ	多摩市・日野市・由来は、かつてこの地域は草木が生い茂る土地であった事に由来する。江戸時代中期以降に「茂草」から「百草」と表記されるようになった。
72	廻田町	めぐりたちょう	東村山市・由来は、この地に古くから暮らしていた人々は、その居を狭山丘陵の山あい定め、丘陵を取り囲むような形で開拓していき、隣村と行き来するために、田から田を廻っていた事に由来する。
73	福生	ふっさ	福生市・由来は諸説あり、有力なのは室町時代に流行した福神信仰により「福」と「生」の文字が当てられたという説と、麻の古語である「総」や「房」を「フサ」と読みそれが転訛した説や、アイヌ語の「湖のほとり」を意味する「フツチャ」の転訛説、地形説では「阜沙」（ふさ）から来たという説で、「阜」は丘や土山、「沙」は砂原や川岸を意味し、福生の地形や地質に合致する事に由来する説がある。
74	狛江	こまえ	狛江市・由来には諸説あり、主なのは朝鮮半島からの渡来人「高麗人」（こまびと）が住んでいたことに由来する説と、多摩川の曲がりくねった流れに由来する説がある。
75	南街	なんがい	東大和市・由来は、東大和市の北部に広がる農村地帯と雰囲気の異なる「南の工場街（通称南街）」に由来する。
76	乞田	こった	多摩市・由来は、かつて圧政により食糧難に苦しんだ村人が、領主に対して「少しでも田んぼを耕させてほしい」と懇願した事に由来。
77	平久保	ぴりくぼ	多摩市・由来は、平らな窪地を意味する。
78	恋路原	こうじっばら	多摩市・由来は、この地域には遊郭があり、ここに居た「恋路」という遊女が武士と恋に落ちたが、二人は結ばれることなく、悲しんだ「恋路」は池に身を投げてしまった。彼女を哀れんだ人々が、その名を残したという言い伝えが由来。また、相模原国府と武蔵国を結ぶ官道「国府路」（こうじ）が変化して「恋路」となったという説もある。この地域は、昔から旅人や武士の往来が盛んでした。
79	天井返	てんじょうがえし	多摩市・由来は、連光寺本村から行くと一番奥（天井）にあたり、そこから引き返す場所であった事に由来する。
80	半過田	はんがた	多摩市・由来ははっきりしませんが、地理的な特徴から判断すると、

			中途半端な場所の田や通過点にある田と思われる。
81	百村	もむら	稲城市・由来には諸説あり、主なものは地形が「裳」(も)のようにひだ状であったことから「モムラ」と呼ばれ、後に「百村」という字が当てられた説。
82	恋久保	おながくぼ	稲城市・この地名は昔「漕窪」と書かれていた。「漕」という字は、船を漕ぐという意味があり、川や沼・湖など、船が行きかう水辺を意味し、「窪」は窪地を表します。
83	鐙野原	あぶのっばら	稲城市・由来は、源義経一行がこの地で休憩した際、義経が馬の鐙(あぶみ)を置き、その場を離れた。しかし、再び戻ることはなく、鐙はそこに忘れられてしまった。そこでこの地を「鐙野原」と呼ぶようになったという。
84	将監谷	しょうぎやと	稲城市・由来は、秋原将監がいたという説のもとになった地名。「ショウギ」は関東の方言で「丸い深爪形」という意味なので、深爪形状の谷という意味と思われる。
85	石名久保	いながくぼ	稲城市・由来については不明。
86	上谷戸	かさやと	稲城市・由来は、「上の谷」を意味し、この地域は丘陵地が浸食されて形成された谷状の地形に由来する。
87	地震谷	じしょういんやと	稲城市・由来は諸説あり、江戸中期の時点で「地震谷」と記録されており、自性院という寺が廃寺となった説や、関東大震災または江戸大地震(1678年)でこの場所が山崩れしたため、この地名が付いた説という説がある。
88	大原	おおっばら	稲城市・由来は、広い平坦な草地や原野を意味する。
89	大廻原	おんまわし	稲城市・由来については不明。
90	栗木坂	くるぎざか	稲城市・由来は、「栗の木がたくさん生えている坂」と思われる。
91	大平	おおっぴら	稲城市・由来については不明。
92	九日田	くんちでん	稲城市・由来については不明ですが、多くの地域は人々が住み始めた古代から、地形や水資源に恵まれた場所に集落を形成して来ました。九日田もそうした自然条件から人が住み始めた所と思われる。
93	和哥藏	わかんぞう	稲城市・由来は定かではないが、「和哥」は平安時代に成立した「いろは歌」の「わか」と関連あると思われる。「藏」は、財物を保管する場所を指す言葉です。
94	打越	おっこし	稲城市・由来は、地形に由来するもの。
95	玉川河原	たまがっかわら	稲城市・由来は、「玉川」は多摩川の別称で、古くから使われた名称。
96	閑古島	かんきょうじま	稲城市・由来については不明。
97	曲根ノ内	かねのうち	稲城市・由来については不明。
98	砂場	すなっぱ	稲城市・由来については不明。
99	浄海	じょうけい	稲城市・由来については不明。
100	風破井	かざへい	稲城市・「風破井」の地名が文献に初めて登場したのは「唐」の時代の「白居易」の詩に見られます。由来については「風」と「井」という言葉から「強い風が吹く井戸」と思われる。
101	光西島	こおせっちま	稲城市・由来は、かつて多摩川の中州であった事に由来する説と、

			「こさえた島」説で人工的に造られた島である事から「コッサエッチマ」と呼ばれた説と、「コセ（作物が生育しにくい島）説がある。
102	新川端	しんかばた	稲城市・由来については不明。
103	幸方	こおかた	稲城市・由来は、中世から近世にかけて農業がさかん名地域として栄えて来ました。「幸」という言葉は「開けた場所」や「開拓地」という意味があり、方は「方面」や「地域」という言葉です。
104	熊野堂	くまんどう	稲城市・由来は、かつては水田の中の熊野信仰の小さな石祠（熊野様）があった事に由来する。
105	城山	きざん	稲城市・由来は、かつてこの場所に存在した「大丸城」という城に由来する。この城は、鎌倉時代末期から室町時代初期に築城された山城で、多摩川の渡河地点を監視する重要な拠点でした。
106	稲荷島	とがちま	稲城市・由来は、多摩川の中州にあった「稲荷島」に由来すると思われる。「とがち」とは「トウガ」で「尖った島」という意味。
107	乙津	おつ	あきる野市・由来は不明ですが、戦国時代よりある地名。
108	油平	あぶらだい	あきる野市・由来は、江戸時代中期に菜種油の生産が急速に広まり、この地域で油が作られていた事に由来する。
109	留原	ととはら	西東京市・由来は、古くは「戸津原」と記され、江戸時代には「富原」とも表記された。その後、濁音化として「とどはら」となり、現在は「ととはら」と読まれている。
110	神戸	かのと	西多摩郡檜原村・由来は、信者に租税を納める民を指す「かんべ」に由来する。これは、神社の所領地を意味し、全国に「神戸」という地名が存在する。
111	人里	へんぼり	西多摩郡檜原村・由来には諸説あり、韓国朝鮮語で「ヘンボリ」と読み「幸福に人が暮らせる里」という意味と、「へ」の誤り説で、「文化文政期（1800年代）に編纂された「新編武蔵風土記稿」には「人」の字は「へ」の誤りで「へんつぼり」から「へんぼり」になったと記されている。昔は「辺里」と書き「はずれの村」という意味があったという説がある。
112	笛吹	うずしき	西多摩郡檜原村・由来は檜原村の一地区名であり、笛吹峠（うずしきとうげ）の名称に由来する。この峠は、土地の人々から「うそふき」や「うずひき」と呼ばれている。
	三都郷	みつご	西多摩郡檜原村・由来は「新編武蔵風土記稿」に記されている中里組、白倉組、大澤組の3つの組（郷）があった事に由来する。
114	大丹波	おおたば	西多摩郡奥多摩町・由来は、多摩川上流域がかつて「たば」と呼ばれていた事に由来する。また、「丹波」の語源には諸説あり、「赤米の稲穂が波打つように実る豊かな国」という解釈や、「平らで広い地」を意味する「田庭」が有力視されている。
115	小丹波	こばた	西多摩郡奥多摩町・由来は、大丹波と同じ。
116	留浦	とずら	西多摩郡奥多摩町・由来については不明。
117	海澤	うなざわ	西多摩郡奥多摩町・由来は、かつて水をたたえていた広い場所を指す慣習に由来すると考えられる。山里でありながら「海」という文字が

			使われているのは、この地域が「水」の豊かな場所であった事を示唆している。
118	上坂	あがっさわ	西多摩郡奥多摩町・由来については不明。
119	登計	とけ	西多摩郡奥多摩町・由来については不明ですが、縄文時代から人々が生活を営んでいた痕跡が多く残されている「登計原遺跡」がある。
120	負夏地	おいなっち	西多摩郡奥多摩町・由来は、昔この地で武士が戦いに敗れ妻子を失った。妻子を失った武士は悲しみに打ちひしがれ、妻子の亡骸を抱きしめ、近くの湖に見を投げたという。その湖はその後「負夏地」と呼ばれるようになったという。
121	雨風理	あめふり	西多摩郡奥多摩町・由来ははっきりしませんが、この地域が雨や風の影響を受けやすい場所だった可能性と思われる。
122	木積場	きつんば	大島町・由来は、木材を集積する場所で、伐採した木々を一時的に保管し、そこから各地に運び出すための拠点に由来する。
123	仲中	なかちゅう	大嶋町・由来ははっきりしませんが「仲」という地名は、ある地域の中央部を示す接頭辞または接尾辞として使われる。
124	利島	としま	利島村・由来は、島の形が尖っていることから「ト（尖）・ガリ島」が簡略化された説と、伊豆諸島で10番目に造られた島から「十島」という説もある。
125	神津島	こうずしま	神津島村・由来は、その昔、伊豆の島々を創造するために神々が集まって相談した場所である事から「神集島」と書かれ、それが転じて「神津島」となったという説。
126	祇苗島	ただなえじま	神津島村・由来については不明。
127	休戸郷	やすんどごう	青ヶ島村・行政上正式な地名ではないが、地元の人たちの間で使われている地名。
128	聳島	むこじま	小笠原村・由来は、聳島列島が「聳島」「媒島（なこうどじま）」「嫁島」と言った親族関係を示す名称で構成されている。

茨城県



NO	地名	読み方	由来
1	木葉下町	あぼっけちょう	水戸市・由来には諸説あり、主なものはアイヌ語の(o-pok (崖の下))に由来する説と、地形由来説で、山肌の崩れた場所を「ぼっけ」、赤土が露出した崖地を「あかぼっけ」と呼び、それが転訛したという説がある。
2	大足町	おおだらちょう	水戸市・由来は、ダイダラボウ伝説に由来し、大男が足を踏ん張った場所が「大足」となったという伝承による。
3	全隈町	またぐまちょう	水戸市・由来は、那珂川の曲がりくねった場所にある土地を意味する

4	上河内町	かみがちちょう	水戸市・由来は、元々「川の内が「かわのうち」が「かわうち」を経て「かわち」にその後に「かち」になった。のちに「上河内」になったという。
5	大甕	おおみか	日立市・由来は、神と人の境界を示す「大甕」が埋められていた、または祭祀が行われた場所に由来する。「甕（みか）」は、酒を入れる器を意味する。現在は「大みか町」と表記されています。
6	神立	かんだつ	土浦市・由来は、雷や雷神を意味する「カンダツ」に由来する。近くに雷神を祀る神社があった事に由来する。
7	常名	ひなた	土浦市・この地名は、中世（鎌倉・室町期）には登場する地名ですが、由来については不明。
8	女沼	おなぬま	古河市・由来については不明ですが、「大きな沼」が変化して「おなぬま」になったとか、地域が小さな尾根や高まりに沿って沼が広がった地形から「尾根沼」が転じて「女沼」になったという説もある。
9	五部	ごへい	古河市・「五部」という地名は、古代の行政区画の「五部」に由来すると思われる。律令時代に朝廷が地方を効率的に統治するために設置した区域が基になっている。五部は複数の郷や里をまとめた地域単位。
10	茨城	ばらき	石岡市・由来は、「常陸国風土記」に記された記述によると「原住民を茨（いばら）の木で作った城（柵）で塞ぎ駆逐したという事に由来
11	加生野	かようの	石岡市・由来は、新たに開発された、草木が生い茂る広々とした原野が由来と思われる。
12	弓弦	ゆづり	石岡市・由来は、日本武尊（やまとたけるのみこと）が東征の際にこの地で弓の弦を張り替えたという伝説や、地滑りが起きやすい地形を表す「ユズル」という地形語に由来する説がある。
13	鹿窪	かなくぼ	結城市・由来ははっきりしませんが、「鹿」という漢字は、古代の日本において神聖な動物とされているので、鹿窪の地は、古代において神聖な場所で窪地を意味すると思われる。
14	七五三場	しめば	結城市・由来は、鎌倉時代頃の「志目波（しめは）郷」に由来する。戦国時代末期には「志めは」と記され、江戸時代初期頃から「七五三場」と縁起の良い名前にしようとしてこの表記が使われ始めた。
15	直鮒	すうぶな	竜ヶ崎市・由来は、かつてこの地域で見られた鮒の群れにちなむ。
16	国生	こくしょう	常総市・由来には諸説あり、国庁（こくちょう）が転訛したものと云う説が有力で、平将門が新たな国府を定めた場所という説もある。
17	収納谷	すのうや	常総市・由来は、地形や歴史に由来する説があるが、地形からは「物を収納するような形状」で、周囲から流れ込む水や土砂を受け止めるような谷の形で、集積地に由来する説は、倉庫や貯蔵施設があった事を示す地名と思われる。
18	曲田	まがった	常総市・由来には諸説あり、小貝川の湾曲部に面していたことから「曲り田」に由来する説と、豊田城の南に位置することから「豊」の字の上部を取り「曲田」と称するようになった説がある。
19	水街道	みつかいどう	常総市・由来には諸説あり、水との関わりが深く、特に「水飼戸」（ムツケヘト）や「御津海道」（ミツカイドウ）に由来する説がある。

			「水飼戸」説は、平安時代の武将、坂上田村麻呂がこの地で馬に水を飲ませたという故事に由来するものと、「御津海道」説では、「御津」（みつ）は官や地頭の為の荷物を積み下ろす船着き場を指し、水運の要衝であった事を示唆している。
20	堅磐町	かきわちょう	常盤太田市・由来は、堅箇な岩場が由来という。
21	天下野	けがの	常陸太田市・由来は、水戸藩主の徳川光圀が、地元の獅子舞を「天下第一」と称賛した事に由来すると伝えられている。
22	高道祖	たかさい	下妻市・由来は、高台に道祖神を祀る神社がある事に由来する。
23	随分附	なむさんづけ	笠間市・由来には諸説あり、主なものは、目下の者に自分の身分に随（したが）って務めを果たすように申し付ける「なふさつ」が転訛した説や、「南無三」（さあ、大変だ）という仏教用語が転訛した説や、アイヌ語説もある。
24	小堀	おおほり	取手市・由来は、利根川の氾濫後に出来た小さな沼や堀が「おっぼり」と呼ばれ、それが転訛して「小堀」（おおほり）になったという。
25	小浮気	こぶけ	取手市・由来は、湿地だった一帯をその特色に合わせて「ふけ」と言い、「小浮気」という地名になった。
26	女化町	おなばけちょう	牛久市・由来は、「狐の嫁入り」伝説に由来する。伝説の「狐の嫁入り」は、昔、根本村の忠五郎という男が獵師に狙われていた狐を助けました。その後、忠五郎の元に美しい娘が現れ忠五郎と夫婦になり3人の子を設けました。しかし、8年後に娘の正体が狐である事が露見し、娘は女化原に姿を消したという伝説です。
27	東獺穴町	ひがしまみあなち	牛久市・由来は、天正19年（1591年）に由良氏が豊臣秀吉から牛久一帯の領地を与えられました。この時、由良氏の領地内に「狸穴」（まみあな）という村が2か所ありました。そこで混同を避けるため、「東獺穴町」とした。
28	天宝喜	あまぼうき	つくば市・由来は、「天の宝剣」にまつわる伝説に由来する。 「天宝剑」伝説は、昔この原野にあった塚から紫の光が放たれ、里人が調べたら一本の剣が見つかった。里人はこれを「天の宝剣」と呼び、祠を建てて祀った処「弁財天の宝剣である」というお告げがあった。その後、弁財天像を背負った雲水が現れ、この地に弁財天が鎮座すべき場所であると告げ、像を里人に託しました。里人は大いに喜びこの地を「天宝喜」と呼ぶようになったという。
29	大角豆	ささぎ	つくば市・由来は、マメ科植物のササゲ（大角豆）に由来する。この地名は、平安時代からあったという。
30	手子生	てごまる	つくば市・由来には2つあり、一つは、鹿島神社の伝承に基づく「手を当てて子が生まれた」という説と、「手子后神社に」祀られる「手子比売命（てごひめのみこと）」に由来する説がある。
31	泊崎	はっさき	つくば市・由来については不明ですが、天正15年（1587年）3月の岡見宗治宛北条氏照書状に「八崎（はつざき）」として登場しています。この文章には、多賀谷氏は「八崎」に城を築いたと記されている。

32	酒列	さかつら	ひたちなか市・由来には諸説あり、祭神である少彦名命が酒造の神である事から、酒瓶を並べて祀った事に由来する説や、海岸の岩石群が傾斜している様子から「逆列」（さかつら）が転じたという説がある。また、「万葉集」にも記載がある歴史の深い地名。
33	蜆塚	しいずか	ひたちなか市・由来は、縄文時代の貝塚からヤマトシジミの貝殻が多数出土した事に由来する。
34	四十発句	しじゅうほっく	ひたちなか市・由来については不明ですが、松尾芭蕉との関連を想像する人もあるが、由来との関係は不明。
35	足崎	たらざき	ひたちなか市・由来は、中世には「多良崎」や「太郎崎」と書かれ、海の突き出た岬を意味する「太郎崎」が転じて「足崎」となった。
36	部田野	へたの	ひたちなか市・由来は、大化の改新後に常陸国に存在した幡多郷の一部で、中世の資料では「戸田野」と記されている。幕末には、天狗党事件の戦場の一つとなった場所。
	貉谷津	むじなやつ	ひたちなか市・由来は、山裾の谷間を意味する「谷津」に由来すると考えられる。この地域には「船窪」や「鍛冶屋窪」など、谷間を思わせる地名が点在する。
38	潮来	いたこ	潮来市・由来は、古代の「伊多久（いたく）」や「板久（いたく）」という表記に遡る。これは「いた（痛）・く（処）」つまり台地の縁の崖のような「傷んだ地形」を指す言葉が語源という。また、江戸時代に潮が海から川へと遡上してくる光景を見て、人々が「いたく」と「潮来」と表記した。この地方では「潮」の事を「いた」と呼んでいる
39	赤法花	あかぼっけ	守谷市・由来には諸説あり、一つは平将門が守屋城を築いた際、城内から見た景色が中国の赤壁に似ていたため「赤法花」と名付けたという説と、古アイヌ語（縄文語）で「崖」や「尾根」を意味する言葉に由来する説がある。
40	女方	おざかた	筑西市・由来は、「平将門の愛妾「桔梗の前」が住んでいた「女館」（おんなかん）が変化したという伝説や、弥生時代の遺跡との関連が考えられる。
41	関本肥土	せきもとあくど	筑西市・由来は、「肥土」は鬼怒川沿いの肥沃な低地を意味し、元々水害の多い耕作に適さない土地を示す「悪土」が、治水技術の進歩により肥沃な土地になった事で「肥土」と表記されるようになった。
42	月出里	すだち	稲敷市・由来には諸説あり、清水が湧き出る地に由来する説、三日月を由縁する説、そして「月の出る夜に鳥が一斉に飛び立つ里」という地元の伝説などがある。
43	行方	なめかた	行方市・由来は、日本武尊（やまとたけるのみこと）がこの地の水辺と台地の入り組んだ様子を「行細し（なめくわし）」という表現をした事に由来する。
44	次木	なみき	行方市・由来は、日光東往還沿いに並木が続いていた事から「並木」が転じて「次木」となった説が有力。
45	畑田	かまた	銚田市・由来は、鎌倉時代には既に存在し「鎌田村」が元の地名と思われる。その後鹿島氏の一族の徳宿朝秀が「畑田朝秀」と名乗り、

			地名も「畑田村」と表記されるようになったという。
46	子生	こなじ	銚田市・由来は、「子を生なす」が転じて「こなす」、さらに「こなじ」になった説がある。この地域には安産や子宝にご利益がある巖島神社があり、地名が決定する以前から安産の神様として知られている事が由来と思われる。
47	樛木	つきぬき	つくばみらい市・由来は、「ツガノキ」または「ケヤキ」が多く生き茂っていた事に由来する。
48	狸穴	まみあな	つくばみらい市・由来は、タヌキやアナグマが住む穴があった事に由来する説が有力。
49	先後	まつのち	小美玉市・由来は、伏見稲荷と松崎稲荷の伝承や、松崎稲荷の分霊を祀った事に由来する説がある。「伏見稲荷と松崎稲荷の伝承」とは、京で前後の稲荷3社が位階を受ける際、伏見が最初に受け、次に松崎を推し、前後の稲荷が「まずあとにしよう」と言った事から「先後」となったという説がある。
50	廻戸	はさまと	稲敷郡阿見町・由来は、霞ヶ浦に挟まれた土地に由来する。また「廻」は曲くねった道「戸」は河岸があった場所を指す。
51	生板	まないた	稲敷郡河内町・由来については不明。
52	大歩	わご	猿島郡境町・由来には諸説あり、アイヌ語の「湿地」を意味する言葉が有力な由来する。その他の由来として、古文書からの変化説や面積単位由来説がある。

栃木県



NO	地名	読み方	由 来
1	鑑山	こてやま	宇都宮市・由来はいくつか考えられるが、地形から「鑑」山という漢字は「鍋」や「釣鐘」のような丸みを帯びた形を表す。「鑑山」が、遠くから見て鍋を伏せたような形からこの地名が付いたと思われる。
2	駒生	こまにゅう	宇都宮市・由来は、宇都宮公剛の時代に高田原で良馬が産出された事から「駒生村」と改称された。
3	徳次郎	とくじろう	宇都宮市・由来は、奈良時代に日光で勢力を持っていた久次良（くじら）氏の一族がこの地に移り住んだ際、日光に久次良氏と区別するために「外久次良」（とくじら）と呼んだ事に由来する。
4	野高谷	のごや	宇都宮市・由来は、河川の氾濫原に由来する地形説と思われる。
5	曲師	まげし	宇都宮市・由来は、江戸時代初期に桧や杉の薄い板を曲げて容器を作る職人である曲げ物師が移住して来た事に由来する。
6	梶	あがた	足利市・由来は、古代の地方行政組織である「梶（あがた）」に由来する。これは、大火の改新以前に存在した地方の支配単位で、後に郡へと編成された。
7	利保町	かかぼちょう	足利市・由来は、「利」の字が示すように「益がある」「得がある」と言った有利な土地、肥沃な小地域を意味し「保」は「里」ほどの地域を表す事に由来する。
8	八椶	やつくぬぎ	足利市・由来は、原野に八枝が繁茂した椶（くぬぎ）の木があった事に由来する。
9	五十部町	よべちょう	足利市・由来は、古代の「余部郷」（あまるべごう）に由来する。余部郷とは、古代の部民制において、一定戸数ごとに集落を編成する規則に入り切らなかった家々で編成された集落が起源とされる。
10	御厨町	みくりまち	足利市・由来は、伊勢神宮の御厨（神領）があった事に由来する。
11	新	あらい	栃木市・由来は、この地域が新しく開拓された土地であった事に由来する。
12	稲荷塚	いなりづか	栃木市・由来は、稲荷神社や稲荷信仰に関連する塚（盛り土）が存在する事に由来する。
13	庚塚	かねづか	栃木市・由来は、古代中国の「干支（かんし）」に由来すると言われるこの地域では、庚の年の庚の日に行われた出来事や、庚に関する信仰に深く関わっていると思われる。道教の庚申塔に関係する。
14	瞽女石	ごぜいし	栃木市・由来は、「ごぜ石の民話」に由来する。この民話は、旅の途中で力尽きた瞽女の話で、ある目の不自由な女性旅芸人が、旅の途中で宿にたどり着けず、悲しみと苦しみの中で夜通し峠を越えようとしたしかし、飢えと寒さで力尽きてしまい、その場で大きな岩に姿を変えたと伝えられる民話です。
15	皂角子戸	さいかちど	栃木市・由来は、「サイカクシ」というマメ科の植物に由来する。昔は石鹼の代わりや薬用として利用された。工場や下請け会社を中心とした工業都市。
16	猿瀧	ざるぶち	栃木市・由来についてははっきりしませんが、この地名は元和2年

			(1616年)の「分和津輕郡之絵図」に「猿淵村」として登場している。
17	戸恒	とづね	栃木市・由来は不明ですが、1575年または1576年の足利義氏印判状に「戸恒郷」として記述されている。
18	帯刀	たてわき	栃木市・由来は、職名に由来する可能性や、武士の帯刀制度に関する地名と思われる。
19	新波	しんば	栃木市・地名の由来は不明。
20	倭町	やまとまち	栃木市・由来は、もともと栃木町の中町・西横町の一部が改称されて成立した地名。
21	五十畑	いかばた	栃木市・由来については不明。
22	新里	にっさと	栃木市・由来は、元から来朝の一山一寧国師(鎌倉建長寺第十世)が1300年ごろ岩船山の西側に創建と伝えられ、元亀2年(1571年)に佐野宗綱により当地に再建、その際人々も移住し、新しい村「新里」の地名の由来となった。
23	曲ヶ島	まがのしま	栃木市・由来については不明。
24	鍙塚町	あぶつかちょう	佐野市・由来は、三杉川の氾濫によって浸食された崩壊地に由来する
25	庚申塚町	かねづかちょう	佐野市・由来は、庚申信仰に基づいて道端に祀られた庚申塚に由来する。庚申塚は、三猿(見ざる・聞かざる・言わざる)が掘られた石などと一緒に建てられることが多い。
26	築地町	ついじちょう	佐野市・築地という地名は、一般的に埋め立てられた事によって造成された土地に由来する。
27	四十八願	よいなら	佐野市・由来は2つあり、1つは仏教の「四十八願」に由来する説で、阿弥陀如来が法蔵菩薩であった時に立てた「四十八の誓願」に由来する説と、2つ目は「黄泉の原」が転じた説がある。昔、この地には伝染病で亡くなった人々を葬る場所があり、人々はそこを「黄泉の原」または「冥土の原と呼んでいた。それがなまって「よいはら」となり、後に僧侶が仏教の「四十八願」の当てたという。
28	縦山町	もみやままち	鹿沼市・由来は、かつてこの地に10軒ほどの家しかなかった頃、凶作に備えて穀物(粃)を西の山の岩穴に蓄えていた事から「粃岩間」と呼ばれた事に始まりで、その後、この地名が「粃山」となり、さらに神社の周りに縦の木が多く茂っていた事から「縦山」に変化したという。
29	小来川	おころがわ	日光市・由来は、14世紀後半の南北朝時代に藤原(万里小路)藤房卿が詠んだ和歌「湧き出だし水上清き小来川真砂も瑠璃の光をぞ添し」に由来する。
30	荊沢	おとろざわ	日光市・由来については不明ですが、平安時代初期8世紀松頃の「日本後記」という歴史書に名前が記載されている。これは、朝廷の東北地方の蝦夷征討を進める中で、軍事拠点として言及されたものです。
31	神鳥谷	ひととのや	小山市・由来には複数あり、「巫鳥(しとど)」という小鳥の古名に由来する説と、かつて湿地であった事から「しとしと濡れる谷」を意味する説がある。

32	道祖土	やさど	真岡市・由来は、八溝山を越えるため道祖神がある事に由来する。
33	砂ヶ原	いさがはら	真岡市・由来については不明。
34	上江連	かみえづら	真岡市・由来については不明。
35	寒井	さぶい	大田原市・由来は、関西弁で「さぶい」と同じで、北風が吹く寒い土地柄から付いた地名です。
36	佐良土	さらど	大田原市・由来は、アイヌ語の「サラ」（カヤツリ草などが生える原野）と「ト」（湖沼や水たまり）の2語を合わせた地名。
37	親園	ちかその	大田原市・由来は、明治7年（1874年）に中井村と八木沢村が合併して「親園村」が成立した事に由来。
38	接骨木	にわとこ	那須塩原市・由来は、ニワトコの木が多く植えられていた事に由来 「ニワトコ」は、骨折の治療に用いられた薬用植物。
39	箭坪	やつぼ	那須塩原市・由来ははっきりしませんが「箭」は「矢」を意味し、「矢のように細長く伸びた地形や、矢が飛んで行くような直線の場所をさし、「坪」は、平らな土地や広い場所を指す事が多い。
40	熱田	にいた	さくら市・由来については不明。
41	上三川	かみのかわ	河内郡・由来は、平安時代中期に作られた辞書「倭名墨聚抄」に記されている古代下野国河内郡の「三川郷」に由来する。この「三川郷」は、田川、無名瀬川、鬼怒川または江川の3つの川によって形成された地域に否定する。
42	三軒在家	さぎざき	河内郡・由来は、戦国時代終わりに、三人の郷士（市川・中村、島野）が移り住んだ事に由来する。
43	蓼沼	たてぬま	河内郡・由来は、下野国河内郡蓼沼郷が起源という。戦国時代には既に記録されている。
44	汗	ふざかし	河内郡・由来には諸説あり、満願寺薬師堂の薬師如来にまつわる伝説や、鬼怒川の渡し船場での「札貸し」が語源になったという説。
45	生田目	なばため	芳賀郡・由来は、この地を拠点とした武士の一族「生田目氏」に由来するという。
46	鮎田	あいだ	芳賀郡・由来については不明。
47	鳥生田	うごうだ	芳賀郡・由来は、村内の石上の水田に大きな石があり、そこに鳥が巣を作り雛をかえした事に由来する。
48	後郷	うらごう	芳賀郡・由来は不明ですが、かつては芳賀郡に属していた。
49	神井	かのい	芳賀郡・由来は、中世の資料に「神江」や「かんの井」と記されている。神聖な水場を意味するか。
50	九石	さざらし	芳賀郡・由来には諸説あり、1つ目は村に存在する「駒爪石（こまつめいし）」に由来する説と、鎮守の宮祭田で「九つの小石で飾られたササラ」が発見された事に由来する。
51	茂木	もてぎ	芳賀郡・由来は、鎌倉時代の有力御家人であった八田知家の子、知基が茂木郡の地頭職に任命され、結城城を築城した際に「茂木氏」と改姓し、その氏名がそのまま町の地名となったという。
52	玉生	たまにゅう	塩谷郡・由来は、天暦年間（938年～947年）に玉鳥屋（たまどりや）の地内から六万石や水晶などが産出した事にちなむ。

NO	地名	読み方	由 来
1	櫛島	ぬでしま	前橋市・由来は、豊城入彦命（とよきいひこのみこと）が東征の際に「ぬるでの木」で采配を振るい大勝した事に由来する、「勝軍木（ぬるで）島」が短縮し「櫛島」となったという。
2	檜物町	ひものちょう	高崎市・由来は、檜物師が多く住んでいたことに由来する。檜物師とは、ヒノキや松などの薄い板を曲げて作る「曲げ物」を作る職人のこと。曲げ物は食器や勝手用品として欠かせないものでした。
3	多比良	たいら	高崎市・由来は、「平」を意味するとされている。
4	櫛尾	ぬでお	高崎市・由来は、かつて使われていた木製の筒（櫛（ぬで））に由来
5	安楽土町	あらとちょう	桐生市・由来は、1873年（明治6年）に今泉村・堤村・本宿村・村松村が合併して「安楽土村」が発足した。
6	黒保根町 宿廻	くろほねちょう しゅくめぐり	桐生市・「黒保根」の由来は、赤城山（特に黒檜山）の古称である「久呂保」（くろほ）に由来する。「宿廻」、鎌倉幕府滅亡後の建武年間（1334年～1337年）頃から深沢城が築かれ、戦国時代には土豪である阿久沢氏の居城となった。
7	広沢町 間ノ島	ひろさわちょう あいのしま	桐生市・由来は、かつては旧境野村と広沢村の一部でしたが、1954年（昭和29年）に境野町間ノ島が第11区から13区に編入され広沢町間ノ島が設置された。
8	寄日	よっぴ	桐生市・由来は、昔この地域で広がる「田」の地形に由来する。
9	大茂	だいもん	桐生市・由来については不明。
10	間野谷町	あいのやまち	伊勢崎市・由来は、北と南の野が出会う谷である事に由来する。
11	采女	うねめ	伊勢崎市・由来は、かつて采女の職に奉仕した人物を輩出した土地である事に由来する。明治22年（1889年）に伊与久村・上淵名村・下淵名村・東新井村・木島村・百々村が合併して采女村が成立した。命名は、故事に基づき俳人の石井常翠翁の提案で名付けられた。
12	田部井町	たべいまち	伊勢崎市・由来は、かつてこの地域に広がっていた「田」の地形に由来すると言われる。
13	境百々	サカイドウドウ	伊勢崎市・由来については不明ですが、采女村構成した「百々村」の構成する一つです。
14	八斗島町	やったじままち	伊勢崎市・由来は、境野八斗兵衛宗澄が稗島（ひえじま）と呼ばれた土地を開拓し、当時の領主に献上した際、その功績を称えて「八斗島」と名付けられたという。
15	治良門橋	じろえんばし	太田市・由来は、江戸時代の篤農家である天笠治良右衛門（あまがさじろうえもん）が用水路に石橋を架けた事に由来する。
16	茂木町	もてぎちょう	太田市・由来は、古くは「茂手木」とも表記され、金山丘陵東南の渡良瀬川中流右岸低地に位置し、西部は洪積台地、東部は沖積低地である事に由来する。
17	堀廻町	ほりめぐりまち	沼田市・由来は、古くは「堀廻村」と呼ばれていた、この地域は、関口村・桜井村・石原村の三つの村に分かれており、集落もそれぞれの旧村名を冠した3組に分かれていた。
18	利根町	となまち	沼田市・由来は、赤城山の神と日光男体山の神の戦いに伝説に由来

	老神	おいかみ	し、傷を負った赤城の神が温泉で癒え、男体山の神を「追い返した」ことから「追神」と呼ばれ、それが転じて「老神」になったという。
19	松井田町 国衙	まつだまち こくが	安中市・古くは「古代上毛野国の国府の所在地」や「国府の穀物献上地」に由来するという。しかし、現在は「和妙抄」に記載されている碓氷郡八郷の一つ「石馬（こくま）郷」が変わったものが定説です。
20	相水谷津	そうずいやつ	安中市・由来については不明。
21	文殊寺	もじょうじ	安中市・由来は、寺院の名称に由来する。「文殊寺」の寺号は、本尊として知恵を司どる文殊菩薩を祀っている事に由来する。
22	三ヶ	さんか	安中市・「三ヶ」という地名は、集落が「上切」「中切」「下切」の3つの島（集落）から構成されていた事に由来する。
23	五ヶ	ごか	安中市・由来については不明。
24	本動堂	もとゆるぎどう	藤岡市・由来は、「動堂」（ゆるぎどう）と呼ばれた「一動寺」に由来する。同寺は、慶長年間（1596年～1615年）に芦田氏によって芦田城下に遷されまで本動堂村にあり、ある早魃（かんばつ）の年に観音堂前で農民らが雨乞をしたところ堂が震動し慈雨に恵まれ、堂を動堂と呼び村名にしたという。
25	神流	かな	多野郡神流町・由来は、町の中央を流れる神流川に由来する。神流川の「カナ」は砂鉄を採集する場所を意味する「鉄穴」に由来する。また、日本武尊説では、上流で弟橘姫の遺髪を流した事から「髪流川」（かみながれがわ）と呼ばれるようになったという伝説もある。
26	魚尾	よのお	多野郡神流町・由来は、日本武尊が東征の途中、空腹と疲労で休んでいた際に、村人が献上した麦飯と鮎を大変喜び、魚の尾まで食べたと言われている。その際に日本武尊が「この地を魚尾と称すべし」と述べたことが地名の起源という。
27	乙父	おっち	多野郡上野村・由来は、木曾義仲の家臣である今井四郎兼平の遺児が郎党と乳母に付き添われてこの地にたどり着き、郎党（男子）が土着した事に由来する。
28	乙母	おとも	多野郡上野村・上記の由来で、乳母が住んだところを「乙母」と呼ぶ
29	甘楽	かんら	甘楽郡甘楽町・由来には渡来人説と地形説の2説あり、渡来人説では古代に朝鮮半島から渡来人が多く住んでいた事に由来し「韓（から）」が転じて「かんら」になったという説と、地形由来説では、甘楽の訓は「カムラ」であり、この付近を流れる鏑川との関蓮から「カブ・ラ」が転じたという説がある。「カブ」には「傾く」という意味の「カブク」と関連し「傾斜地」を指す、または「カブル（被る）」と関係し「高くなった場所と言った地形的意味合いがある。
30	ハツ場	やんば	吾妻郡長野原町・由来には諸説あり、主なものは狭い谷間で獲物を追い込み矢を射た場所である「矢場」が転じたという説と、狩猟の為に8つの落とし穴があった事から「8つの穴場」が転じた説、そしてかわの流れが急な場所を指す「谷場（やば）」が転じたという説。
31	中之条	なかのじょう	吾妻郡中之条町・由来は、中世中ノ庄と言われ、吾妻庄の中心部に位置していた事に由来する説と、山代庄説では「吾妻原町記」によると

			「中ノ庄」は「山代庄」とも呼ばれていた時もある説がある。
32	尻高	しったか	吾妻郡高山村・由来は、永禄8年（1565年）の武田信玄の願文に「尻高」と記されているほど古くから存在し、由来には諸説あり「尻」には「底」や終わり」といった意味があり、微高地であったので付いた説と、アイヌ語で「シリ」が山、「タツパ」は丸い山を意味する言葉で、複合して出来た地名とも考えられる。
33	孀恋	つまごい	吾妻郡孀恋村・由来は、日本武尊（やまとたけるのみこと）が亡き妻である弟橘姫（おとたちばなひめ）を偲んで「吾妻者耶（あずまはや）」（ああ、わが妻よ、恋しい）と嘆いたという伝説に由来する。
34	政所	まんどころ	利根郡みなかみ町・由来は、かつてこの地に政所（まんどころ）という役所が存在していた事に由来する。
35	師	もろ	利根郡みなかみ町・由来は、かつて存在した師田村（もろだむら）に由来する。旧新治村の一部。
36	御座入	みざのり	利根郡片品村・由来は、都から身分の高い人がこの地に来て住んだという伝承に由来する説と、また、和銅年間（708年～715年）に巨勢朝臣麿（こせのあそんまろ）が鎮東将軍として陸奥へ行く途中に一時滞在した事に由来する説もある。
37	邑楽	おいら	邑楽郡邑楽町・由来は、古くは「おはらぎ」と読まれていた。この地域は、かつて池沼が点在する低地であった事を示す「池田」「仙田」「八田」という郷名が「和名抄」に記されており、地形に由来する可能性が高い。かつて藤原京から出土した木簡に「大荒木評」と記さる多物があり、これを邑楽郡の古名とする説もある。
38	鶉	うずら	邑楽郡邑楽町・由来は、足利吉兼が鎌倉から足利へ向かう途中、鶉を捕らえ、夢のお告げで放鳥した後に高い地位を得たという言い伝えに由来する。
39	狸塚	むじなづか	邑楽郡邑楽町・由来は諸説あり、主なものはかつてタヌキが塚に穴を掘って住んでいた事から付いた説と、タヌキのいたずれ説で、集落の雨戸をたたきタヌキを若者たちが捕まえようとしたところ、阿弥陀堂に逃げ込み、本尊と同じ姿になったという話が残っている。
40	女屋町	おなやまち	前橋市・由来は、かつて利根川がこの地域を流れていた頃、川岸に主人や息子に先立たれた女主人が営む店があり、その店が「女屋」と呼ばれており、利根川の流路が変わった後、その跡地に出来た集落が「女屋」と呼ばれるようになったという。
41	六合	くに	吾妻軍中之条町・由来は、入山、小雨、生須、日影、赤岩、太子の6つの大字（旧村）が合併した事に由来する。また、「六合」を「くに」と読むのは「古事記」や「日本書紀」に記された「天地四方をもって六合（くに）を成す」という言葉にちなむ説です。

埼玉県



NO	地名	読み	由来
1	清河寺	せいがんじ	さいたま市・由来は、臨済宗円覚寺派の寺院「清河寺」に由来する。この寺院は、1360年に初代鎌倉公方足利基氏が兄の菩提を弔う為に創建された。
2	西遊馬	にしあすま	さいたま市・由来には諸説あり、古代の牧（牛馬を放し飼いにする場所）に由来する説と、淡川沿岸の低湿地帯であった事に由来する説がある。
3	水判土	みずはた	さいたま市・由来は、かつて水田地帯であった事に由来し、「水波田」とも表記された。この地名は戦国時代には存在し、縄文早期から後期の水判土遺跡もある。
4	風渡野	ふっとの	さいたま市・由来は、女性器の古語である「ホト」が転訛したという説がある。これは、台地に挟まれた土地の形状が女性器を連想される

			為と考えられる。
5	猿ヶ谷戸	さるがやと	さいたま市・由来は、「カイト＝垣内」という言葉が関係している
6	宮ヶ谷戸	みやがやと	さいたま市・由来は、「宮」と「谷戸」という地形を表す言葉の組み合わせにあります。「宮」は神社や皇族の住居などを指す言葉で、谷戸は丘陵地が水に浸食された地形を指します。
7	円阿弥	えんなみ	さいたま市・由来は、戦国時代に岩槻城主太田氏の家臣で、書記役を務めた「円阿弥」という人物が居住していた、または所領であった事に由来する。
8	新開	しびらき	さいたま市・由来は、天正18年（1590年）の豊臣秀吉による小田原攻めで岩槻城が落城した後、その家臣たちがこの地に土着し、新たに村を開いた事に由来する。
9	神田	しんで	さいたま市・由来は、伊勢神宮の神領で稲を作る田んぼがあった事に由来する。
10	文蔵	ぶぞう	さいたま市・由来は、「文蔵」という人がこの地を開拓したという言い伝えがあります。
11	道祖土	さいど	さいたま市・由来には諸説あり、道祖神（賽の神）に由来する説と、戦国時代の武将である道祖土氏に由来する説がある。
12	釣上	かぎあげ	さいたま市・由来は、綾瀬川の曲がりくねった形状に由来する。
13	安比奈	あいな	川越市・由来は、的場村と柏原村に挟まれた小さな村に由来する。
14	田面沢	たのもざわ	川越市・由来は、古くからこの地域で詠まれて来た歌「三芳野のたのむの雁」由来する。1889年4月1日に小室村、今成村、小ヶ谷村野田村、野田新田が合併して「田面沢村」が誕生した。
15	鉦打町	かねうちまち	川越市・由来は、昔この地で鉦（かね）を打ち鳴らして祭事が行われた事に由来する。
16	郭町	くるわまち	川越市・由来は、川越城の本丸があったエリアであることに由来する
17	妻沼	めぬま	熊谷市・由来は諸説あり、男沼との対比説では、かつて利根川流域に存在した二つの大きな沼のうち、下の沼を「女沼（めぬま）」、飢えの沼を「男沼（おぬま）」と呼んだ事に由来する。
18	御稜威ヶ原	みいずがはら	熊谷市・由来は、昭和13年10月10日に昭和天皇が三尻飛行場に行幸され、航空兵の訓練を視察された事に始まります。当時の飛行学校長であった江橋栄次郎中將が、この時の感激を「さしつけに仰ぎまつわれる御稜威（おおみいず）伝えてはげめ 空の益荒雄（ますらお）」と歌い、飛行場を「御稜威ヶ原」と名付けた。
19	万吉	まげち	熊谷市・由来には複数あり、「牧」の当て字や条里制に基づく「牧津理」に由来する説と、また、「曲地」（まがりち）が転訛したという説
20	楊井	やぎい	熊谷市・由来は、昔この地域にヤナギが多く自生していた事に由来。
21	十二月田	しわすだ	川口市・由来は、昔、12月の大晦日にキツネが杉の葉で田植えのマネをしたという奇妙な伝説が由来という。
22	榛松	はえまつ	川口市・由来は、「南側に枝葉が這うように広がっていた古い松の木に由来する。元々は「這松」へと表記が変化したと考えられる。
23	利田	かがだ	行田市・由来ははっきりしませんが、平安時代後期の田地を指す歴史

			民俗用語として「利田（りでん）」という言葉がある。
24	飛沼原	とぬまはら	秩父市・由来は、地形から水鳥がたくさん飛び交う地域の沼地から付いたと思われる。
25	道明石	みちあかし	秩父市・由来は、かつて浦山川沿いに集落があった場所を指し、古い地形図には「道明石」と表記されている。この地域はダム建設により水没している。
26	寄国土	ゆすくど	秩父市・由来には諸説あり、伊勢神宮との関連説と地形・環境との関連説がある。伊勢神宮説では、伊勢神宮に奉納する米や産物が「寄せ集め」られていた場所なのでないかという説と、「国土」という言葉が、神の土地、つまり神宮の広大な領地をしている説。地形・環境説では、昔のこの地域の地形や環境から名づけられた説。
27	神米金	かめがね	所沢市・由来は、明治9年（1876年）の部落合弁の際に、神谷新田の「神」、久米新田の「米」、掘兼新田（当時は（掘金）と表示）の「金」の3つの地名から一文字筒取って名付けられた地名。
28	下赤工	しもあかだくみ	飯能市・由来は諸説あり、「赤土」に由来する説と、大量の紙漉き（和紙）が行われていた事に由来する説がある。江戸時代初期には「赤内匠（あかだくみ）村」という一つの村でしたが、元禄郷帳には「上赤工村」と「下赤工村」と記されており、この頃に分村した。
29	征矢町	そやちょう	飯能市・由来は、平将門が放った矢が落ちた場所に、征矢神社が祀られた事に由来する。
30	双柳	なみやなぎ	飯能市・由来は、平安時代の弘仁5年（814年）3月、現在の双柳稲荷神社の南西にあった2本の古いヤナギの木の下に、2匹の白狐が並んで現れました。この出来事から、この地を「双柳（なみやなぎ）」と呼ばれるようになったという。これを聞いた弘法大師が稲荷を勧請したとも言われています。
31	矢嵐	やおろし	飯能市・由来には複数あり、主なものは地形に由来して、「矢」は岩「おろし」は崖を意味し、岩の崖がある場所を表している説と、平将門伝説に由来する説で、戦勝を祈願して放った矢が下りた場所が「矢嵐」になったという説で、「征矢町」の由来と類似する伝承がある。
32	蟬指	せみざす	飯能市・由来は、「サス」という地形を表す言葉に由来する。
33	加須	かぞ	加須市・由来は諸説あり、「加増（かぞう）」が転じて「加須」になったという説が有力で、これは新田開発によって石高が増加した事に由来する。また、河洲（かす）転訛説で、利根川本流の「河の洲（かす）」が転じて「加須」になったという説がある。
34	牛重	うしがさね	加須市・由来ははっきりしませんが、この地域の鎮守が天神社である事や、近くに「種足（たなだれ）」という地名がある事から「さね」が「鉄」を指し、古代の製鉄に関連する可能性が示唆されている
35	種足	たなだれ	加須市・由来は、古くは「種垂」と書いていたが、意味は不明ですが「たれ」はこの地域の方言で「滝」の事かと思われる。
36	志多見	したみ	加須市・由来は、明確には特定されていませんが、「カガ」という「やや開きにくい草生地」を意味する言葉に由来すると思われる。

37	礼羽	らいは	加須市・由来は諸説あり、「鷲宮神社で礼儀を済ませた鷲がこの地に羽を落とした」という説と、アイヌ語の「ライバ」（水平で低い土地）に由来する説、中世の武将（礼羽次郎）が住んでいたという説がある。
38	五十子	いかっこ	本庄市・由来は、室町時代中期にこの地に築かれた五十子陣（いかっこじん）に由来すると考えられる。五十子陣は、関東管領上杉房顕が古河公方足利成氏との対決の為に築いた重要拠点。
39	吉田林	きたばやし	本庄市・由来は、平安時代の児玉郡に見られる「黄田郷（きたのごう）」に由来する。また、「北にある木の多い場所」を意味する「北林」に、縁起の良い「吉」の字を当てて「吉田林」になったという説
40	神戸	こうど	東松山市・由来は、神社領があった事に由来する。
41	箭弓	やきゅう	東松山市・由来は、「箭弓稲荷神社」の社名に由来し、この神社は元々「野久稲荷神社」という社名でしたが、源頼信が平忠常追悼の際に先勝祈願を行い、白羽の矢（箭）の形をした白雲を見たという故事にちなんで「箭弓稲荷大明神」と改称されたと伝えられる。
42	下青鳥	しもおどり	東松山市・由来は、古くは石橋村の小名である宿青鳥・内青鳥と合わせて「青鳥」と呼ばれている。この「青鳥」という地名は、青鳥判官藤原常儀が築城したとされる青鳥城に由来するという伝説がある。
43	羽生	はにゅう	羽生市・由来は、埴輪が由来とする説は有力で、この地域は古くから農耕文化が栄え、多くの古墳や埴輪が出土している。粘土質の赤土を意味する（はに）が多く産出される場所を意味する「生（う）」が合わされ「埴生」となり、後に「羽生」と表記されるようになった。
44	村君	むらきみ	羽生市・由来は複数あり、主なものは村君王子という人物を祀る鷲神社に由来する説と、古代の村落の首長を指す「邑君」に由来する説。
45	弥勒	みろく	羽生市・由来は明確なものはありませんが、創建年代は不明ですが「円照寺」の弥勒菩薩に由来する可能性も考えられる。
46	生出塚	おいねづか	鴻巣市・由来は定かではありませんが、小杵柄（おきねづか）という古墳が転じて「おいねづか」になったという説がある。
47	屈巢	くす	鴻巣市・由来には諸説あり、「屈須」とも表記され、角川の地名辞典には4つの由来が紹介されている。また、大和の「国栖」（くず）と同様に、土着の原住民を意味する説もある。また、元来は「国主」と書かれていたが、正長年間（1428年～1429年）に神社の境内の老榎樹に鷲が棲み着き、度々子供を傷つけた事から村人がこの鷲を祀って鷲神社と号してからは、鷲も巣の中に屈して出てくることもなくなったために「屈巢」と改めたという伝説がある。
48	荊原	ばらはら	鴻巣市・由来は諸説あり、「荊（いばら）の原」からきている説や、「バラ」には「切り開く」という意味があるため、開墾された土地を指すとも考えられる。
49	下忍	しもおし	鴻巣市・由来は、かつて存在した水攻めで知られる忍城に関係すると思われる。下忍の地名の下は、上（殿様）に対するもので、当地は武士が棲んでいた所から、忍城に対して下忍と呼ぶようになったという
50	手計	てばか	深谷市・由来には複数あり、一つは、源義家が戦いで切り落とされた

			片腕を埋めた地であるという伝説から「手墓」(てばか)と名付けられたという説と、アイヌ語で「崖」を意味する「ハケ」が「はか」に転じたという説や古名の竹幌(縄張り・垣根)が手計幌から手計となったという説がある。
51	上敷免	じょうしきめん	深谷市・由来は、かつて雑色人(ぞうしきにん)と呼ばれる職人が住み、租税を免除されていた事に由来する。雑色人とは、古代の律令制下で特殊な技術を持つ集団や、鎌倉・室町時代の下級役人・技術者などの租税を免除していた。
52	起会	おきあい	深谷市・由来については不明。
53	遊馬町	あずまちょう	草加市・由来には複数あり、一つは、古代に馬の放牧をしていた「牧(まき)」に由来する説と、「アソ」が水の浅い場所や湿地「マ」が湖沼や狭間を意味し、低湿地の地形に由来する説がある。
54	仏子	ぶし	入間市・由来には複数あり、有力なものは地形に由来する「フジ」の転訛や、南北朝時代の落武者「武四」に由来する説がある。
55	舎人新田	とねりしんでん	桶川市・由来は、元和年間(1615年~1624年)に加納村の舎人という人物が開発した新田に由来する。
56	栢間	かやま	久喜市・由来ははっきりしませんが、元は「萱間」と書いた。「間(ま)」はアイヌ語でわずかな水面、湖沼、小島などの意味がある。
57	圻	がけ	八潮市・由来には複数あり、水が流れる際に「土」が「行」く様子を表すという説と、崖を意味する中世の漢字「圻」が変化して定着したという説がある。
58	采女	うねめ	三郷市・由来は、元禄時代に森采女(もりうねめ)が開墾した「采女新田」に由来する。
59	粟生田	あおた	坂戸市・由来は、「粟生(あわふ)」という言葉が畑地を意味する事に由来する。
60	入西	にっさい	坂戸市・由来は、かつてこの地域が入間郡の西方に位置したため「入西領」と呼ばれた事に由来する。
61	内国府間	うちごうま	幸手市・由来は、かつてこの地域に武蔵国の国府があった事に由来する。「内国府間」と「外国府間」がある。
62	外国府間	そとごうま	幸手市・由来は「内国府間」と同じ。
63	脚折	すねおり	鶴ヶ島市・由来は複数あり、主なものは「ス(洲)・ネ(峰)・下り」が転訛したもので、砂地の微高地や自然堤防からの坂の地形を示している説と、昔この地にあった急な坂道で「足の骨を折った」という説がある。
64	猿田	やえんだ	日高市・由来は諸説あり、日本神話の道案内の神である「猿田彦命(さるたひこのみこと)」に由来する説と、アイヌ語や琉球語で「先達」や「前にある道」を意味する言葉に由来する説がある。
65	女影	おなかげ	日高市・由来には諸説あり、主なものは「千丈ヶ池(現在の仙女ヶ池)」に身を投げた女性(せん)の影が池に現れた事に由来する説があるが、この説は後世に作られた「作り話」という見方もある。
66	高麗	こま	日高市・由来は、716年に古代朝鮮半島の高句麗(こうくり)から

			の渡来人である高麗人が移住し「高麗郡」が置かれた事に由来する
67	三芳	みよし	入間郡・由来は、明治22年(1889年)に竹間沢、藤久保、北永井、上富の四村が合併して三芳村となった際「伊勢物語」に登場する歌枕「三芳野の里」に由来する。
68	毛呂	もろ	入間郡・由来は諸説あり「神聖な土地」を意味する「みもろ」が転じたという説と、「村落」を意味する「もろ」に由来する説がある。
69	越生	おごせ	入間市・由来は諸説あり、平野と山地の接点に位置し、秩父や上州へ向う際に尾根や峠を越える必要があった事から「尾根越し(おねごし)」が転じて「尾越し(おごし)」となり、更に「おごせ」に変化したという説が有力です。
70	如意	ねおい	入間市・由来は、かつてこの地にあった如意寺に本尊として祀られていた如意輪観音に由来する。
71	鞆負	ゆきえ	比企郡・由来は、「鞆(ゆぎ)」とは、矢を入れる道具で、これを背負って運ぶ人の事で、当地に住んだ「鞆負尉(ゆきえじょう)」ことに由来する。
72	蚊斗谷	かばかりや	比企郡・由来は、かつて蒲(がま)が多く生い茂る原野を刈り取って開拓したことに由来するもので、「蒲刈谷」と称されたものが、後に表記を改められた。
73	大豆戸	まめど	比企郡・由来は複数あり、地形に由来する説では「マミド」や「ママド」と言った崖や急傾斜面を意味する言葉と「ド(場所)」が組み合わさった「垢のある場所」を意味する説と、師岡熊野神社への大豆奉納に由来する説が有力です。
74	櫛平	くにぎだいら	比企郡・由来は、櫛(くぬぎ)の木が豊富に自生していたことに由来
75	男衾	おぶます	大里郡・由来は諸説あり、奈良時代から存在する「男衾郡」に由来する説で、古代の寝具である「衾(ふすま)」に関連した説と、地形を表す「はざま」が転じたという説がある。
76	波久礼	はぐれ	大里郡・由来は、地形が崩れやすい危険な場所を意味する「破崩(はぐれ)」に由来すると伝えられる。
77	風布	ふうぶ	大里郡・由来には諸説あり、山に囲まれた地形から暖かい空気が漂い、風が布を牽いたように見える現象に由来する説と、アイヌ語の「フウブ(フツブ)」に由来するという説がある。
78	百間	もんま	南埼玉郡・由来は複数あり、主にアイヌ語に由来する説と、行基菩薩の伝承に由来する説がある。アイヌ語の「モ」は「静かな」、「マ」は「湖沼」を意味し「静かに水をたたえた沼」を意味で、行基菩薩の伝承説では、行基菩薩がこの地を船で訪れた際、上陸した場所に地蔵尊を安置し、そこから神聖な地までの距離を測ったところ、百間あったことに由来するという伝承がある。

神奈川県



NO	地名	読み方	由来
1	尻手	しって	横浜市鶴見区・由来には複数あり、主なものは「川尻」や「野尻」のように、川やある地域の端、あるいは後方にある土地を意味する「尻」の字が使われたという説です。
2	佃野町	つくのちょう	鶴見区・佃野町の名は、1979年7月の住居表示に伴い、鶴見区と元宮2丁目の一部を分離して新設されたものです。

3	神大寺	かんだいじ	神奈川区・由来は、戦国時代に小机城代であった笠原信為が、父の供養の為に建立した「神大寺」という寺院が語源です。この寺院は火災に遭い、小机に移転しています。(雲松院)
4	浅間町	せんげんちょう	西区・由来は、地域内に鎮座する浅間神社に由来します。元々は「芝生」という地名でしたが「死亡」に通ずる事を住民が嫌い。明治34年(1901年)に浅間町へ改称した。
5	尾上町	おのえちょう	中区・由来は、謡曲「高砂」に登場する「尾上の松」に由来する。
6	根岸加曾台	ねぎしかぞうだい	横浜市中区・由来は、昭和33年(1933年)4月1日に根岸町の一部を編入して新設された町です。
7	弘明寺町	ぐみょうじちょう	南区・由来は、横浜市内で最も古い寺院である「弘明寺」に由来する。この寺院は、古くは「求明寺」(ぐみょうじ)と表記されていた。
8	蒔田	まいた	南区・由来には複数あり、一つは、耨を直接耕地に撒く農法に由来する説と、更級日記に登場する「あすだ川(明田川)」が、大岡川下流部を指す古名であり、「めいた」が転訛して「まいた」となったとする説
9	帷子町	かたびらちょう	保土ヶ谷区・由来には諸説あり、1つ目は地形説で、片方が山で、もう片方が田畑の平らな地形をしていたので「片平」と呼ばれ、その後に「帷子(かたびら)」となった説と、2つ目は衣類説で、「帷子」という言葉が裏地のない単衣の着物を指す事から、地形が着物の帷子に似ている事から付いた説、3つ目は潟説で、かつて海が入江となっていた地域が「潟(がた)」と呼ばれ、これが転じて「帷子(かたびら)」となったという説がある。
10	神戸町	こうどちょう	保土ヶ谷区・由来は、久良岐郡の郷家が「郷戸(ごうど)」に転じ、伊勢神宮の御厨として明神社に設けられた「神戸(かんべ)」が合わさって「神戸(ごうど)」と呼ばれるようになったという。
11	氷取沢町	ひとりざわちょう	磯子区・由来には複数あり、鎌倉時代に北条高時へ氷を献上した事に由来する説と、砂鉄が採れて鍛冶職人が多く居た事に由来する説がある。
12	屏風浦	びょうぶがうら	磯子区・由来は、鎌倉時代に源頼朝が、白い海食崖のように連なる景観を絶賛し「屏風のある浦に行きたい」と命じた事に由来する。
13	乙舳町	おっともちょう	金沢区・由来は、安藤広重の金澤八景の一つの「乙舳規範(おっともきはん)」に由来する。
14	新羽町	にっぱちょう	港北区・由来には複数あり、主なものは鶴見川の舟運で荷物を上げ下ろしする「荷場(にば)」が転じて「にっぱ」になったと説と、「新」は開拓地、「羽」は「端(はし)」を意味し、丘陵の端に開墾された土地を指すという説がある。
15	大豆戸	まめど	港北区・由来には諸説あり、主なものは「真間処(ままだ)」が転訛したという説の「真間処」は、崖や急斜面を意味する「マメ(マミ、ママ)」と場所を意味し、「ド」が合わさったもので。大豆戸町の地形が丘陵地と低地の間に位置し、急坂や崖地が多い事に由来する。
16	汲沢	ぐみさわ	戸塚区・由来には複数あり、主なものは古くは「茱萸沢(ぐみさわ)」と書かれており、グミ科の植物の「グミ」の木に由来するという説と

			「クミ」という言葉が「狭間（はざま）」を意味し、それが転じて「グミ」になったという説や、入江や山影の隠れた土地を指す「隠（コミ）」が転訛したという説も存在する。
17	野庭町	のばちょう	港南区・由来は、「山の裾野」や「山麓の緩い傾斜地」を意味する「ノ」のつく地形に由来する説がある。かつては「上野庭町・下野庭町」に分かれていた。
18	日限山	ひぎりやま	港南区・由来は、日限山一丁目にある「日限地蔵尊」に由来する。この地蔵尊は、江戸時代末期に病に苦しむ農民が旅の僧に教えられ、信仰したところ病が完治した事から、その功德を広めるために「伊豆三島の連磬寺」から勧請し。福德院の本尊として祀られたもの。
19	万騎が原	まくがはら	旭区・由来は、平安時代の「牧ヶ原」と鎌倉時代の「畠山重忠の乱」という二つの歴史的背景に由来する。
20	三ツ境	みつきょう	瀬谷区・由来は、かつて存在した三つの村の境に位置していた事に由来する。
21	犬山町	いのやまちょう	栄区・由来は、かつて猪（いのしし）を狩っていた（猪の山）が転じて「犬の山」になったという説がある。
22	公田町	くでんちょう	栄区・由来は、律令時代に行われた口分田の余剰地である「公田」が起源という。
23	鉄町	くろがねちょう	青葉区・由来は、鎌倉時代の資料に「黒鉄」と記されており「くろがね」という音に後から「鉄」の字が当てられたと思われる。この「くろがね」は、曲がりくねったあぜ道や、岩や崖の谷の地形を表す言葉に由来する。
24	保野	やすの	青葉区・由来ははっきりしませんが、かつて律令制下の荘園の一部が「保」という行政単位があった地域が、その周辺が開けた土地を指して「保野」になったという説もある。
25	池辺町	いこのべちょう	都築区・由来は、宗忠寺の前に大きな池があり、その池の辺りに村があった事に由来する。古くは「いこのべ」と読まれ「伊子野辺」や「池野辺」とも表記された。
26	川向町	かわむこうちょう	都築区・由来は、鶴見川の南側に位置し、「川の向こう側」または「川に向かっている場所」という地理的特徴に由来する説や、かつては鶴見川対岸の小机村の一部であり、川の氾濫によって川向こうの土地になった事が地名になった説もある。
27	城古場	ぎこば	都築区・由来は、かつてこの地に城があった事に由来する。
28	砂子	いさご	川崎市川崎区・由来は、多摩川の砂洲の上にあり、多摩川河口の形成された寄洲の砂や砂地の地形を「イサゴ」と呼んだ事に由来する。
29	等々力	とどろき	中原区・由来は、多摩川の水の流れる音が周囲に響き渡る様子に由来する。この地域は、かつて多摩川の支流である谷沢川が多摩川に合流する地点であり、その合流点での川の水の轟音が地名になった説。
30	明津	あくつ	高津区・由来は、河沿いの低湿地を意味する言葉に由来する。「明津」という漢字表記は珍しく「あくつ」を「坏」や「阿久津」、「悪津」など書かれる事が多く、湿地の状態を表記する漢字がある。

31	菅仙谷	すげせんごく	多摩区・由来は、「菅（すげ）」という草が多く生えていた事と、寿福寺西の谷戸である「仙石谷」に仙人が住んでいたという伝説に由来
32	神木	しばく	宮前区・由来は、かつて神之木町2丁目にあった「第六天」を祀った社のご神木が由来。
33	橘樹郡	たちばなぐん	川崎市・由来には複数あり、主な説は日本武尊の東征に同行した弟橘姫の伝説に由来する説と、6世紀前半に有力豪族が朝廷に献上した橘花屯倉（たちばなのみやけ）が中心となって郡が形成されたという説
34	不入斗	いりやまず	横須賀市・由来は、平安時代に寺社領などで貢納を免除された「入会権」を持つ免税地であった事に由来する説や、谷の入口を意味する「入山瀬（いりやませ）」が転じたという説がある。
35	追浜	おっぱま	横須賀市・由来には諸説あり、一つ目は源頼朝の嫡男である源頼家が追手に追われた浜「追い浜」が転じて「追浜」になったという言い伝えが広く知られています。また、かつては「おいはま」と呼ばれていた小字地名が「おっぱま」に変化したという説や、源範頼が鎌倉から追われた際に上陸した浜に由来するという説もある。
36	公郷町	くごうちょう	横須賀市・由来は、中世に「公郷寺方給田」という守護不入地が存在した事に由来すると思われる。
37	比与宇	ひよう	横須賀市・由来は、戦前に旧海軍軍需部の火薬庫や弾薬庫が置かれていた事に由来する。
38	逸見	へみ	横須賀市・由来には複数あり、海辺の地形に由来する説や、雨が降ると水が流れやすい場所を意味する説がある。
39	入野	いの	平塚市・由来は、かつては「入部（いりべ）」と呼ばれており、荘園時代に公所村の農民がこの地で耕作していた「入作（いりさく）」に由来
40	鬼城	おんじろ	平塚市・由来については不明。
41	纏	まとい	平塚市・由来は、1876年に幕府領であった「松延（まつのぶ）、友牛（ともじ）、久松（ひさまつ）」という3つの村の頭文字を「まとい」と繋げ、漢字の「纏」を当てたもの。
42	烏啼	からすなき	平塚市・秦野市・由来は、「三ノ宮の神輿がここを通る頃に夜が明けてカラスが泣いたから」という説話と、「小高く切り立った崖」を意味するという説もある。
	公所	ぐぞ	平塚市・由来は、正確な苦言は不明ですが、源頼朝が政権基盤を固めるために設置した「公文所」が関係している。「公文所」は、年貢などを徴収する場所であり、当初は「ぐしよ」と呼ばれたが、これが転じて「ぐしよ」になったという。
44	達上ヶ丘	たんじょうがおか	平塚市・由来は、昭和34年（1959年）の町名番地整理の際に名付けられ、丘の上に位置する地形に由来する。
45	寺田縄	てらだな	平塚市・由来は、「寺」と「棚」「手縄」「縄」と言った文字が組み合わされて来た地名と思われる。1700年後半の資料にもみられる。
46	扇ガ谷	おうぎがやつ	鎌倉市・由来は、主に「鎌倉十井」の一つである「扇ノ井」に由来する説と、地形が扇の形をしている事に由来する。
47	化粧坂	けわいざか	鎌倉市・由来には諸説あり、平家の大将の首を化粧して首実検をした

			という説と、遊女がいたという説、険しい坂が転じたという説もある
48	十二所	じゅうにそ	鎌倉市・由来は、「十二郷ヶ谷」と呼ばれていた事に由来する説や、熊野神社の十二社があった事に由来する説がある。
49	西御門	にしみかど	鎌倉市・由来は、鎌倉幕府の鎌倉（大倉）御所の西門があった事に由来する。
50	城廻	しろめぐり	鎌倉市・由来は、かつてこの地にあった玉縄城の「城の廻り（周り）」に由来する。
51	瀬郷	おそごう	藤沢市・由来は、かつてこの地に沼地が多く「カワウソ」が多く生息していた事に由来する。
52	大庭	おおば	藤沢市・由来は、この地域の広々とした平坦な地形を意味する。平安時代中期に作られた辞書「倭名抄」には「大庭郷」の名が記されており、延長5年（927年）に架かれた「延期式」には、この地の鎮守である「大庭神社」が記されている。
53	鶴沼	くげぬま	藤沢市・由来は、かつてこの地域の沼地に白鳥の古名である「鶴（くぐい）」が多く飛来していたことに由来する。
54	大鋸	だいぎり	藤沢市・由来は、中世から材木を切るのに使われた「大鋸（おが）」というノコギリに由来する。この地域には、鎌倉時代からノコギリ職人「大鋸引（おがびき）」が多く住んでいた。
55	入生田	いりゅうだ	小田原市・由来については不明。
56	上町	かみまち	小田原市・この地名は複数存在し、横須賀市の「上町」は軍港都市として発展した地域で、崖地の上に位置する事により付いた地名か？
57	栢山	かやま	小田原市・この地名は、戦国塩代に存在した相模国栢山郷に由来し、かつては「香山」「加山」「賀山」とも表記されている。
58	川勾	かわわ	小田原市・由来は、かつてこの地を流れていた押切川の曲流に由来する。川が曲がりくねって流れる様子から「川輪」となり、それが転じて「川勾」となったと思われる。
59	国府津	こうづ	小田原市・由来は、奈良時代から平安時代にかけて相模国（さがみのくに）の国府へ通じる「津（港）」が置かれていた事に由来する。
60	酒匂	さかわ	小田原市・由来には諸説あり、1つ目は「日本武尊の伝説」で、東征の際に龍神に神酒を川に注いだ処、川面に酒の香りが漂った為「酒匂川」と呼ばれた伝説と、川の逆流説で「匂（におい）」は「匂（こう）」の誤りであり、川の逆流による（逆川（さかがわ））に由来する説と、川の曲折を指す（さかわだ）に由来する説もある。
61	曾我光海	そがこうみ	小田原市・由来は、江戸時代に存在した「小海耕地（こうみこうち）」という土地に由来する。この「小海耕地」は、水に浸かっていた土地で、開発事業の完成を記念して建てられた「小海開発碑」には「小海」がすなわち「光海」とであると記されている。
62	行谷	なめがや	茅ヶ崎市・由来は、戦国時代にこの地を支配していた後北条氏の家臣行谷藤五郎という武士がこの地を開拓した事に由来する。
63	逗子	ずし	逗子市・由来には諸説あり、延命寺に安置されていた地藏尊の厨子に由来する説と、交通の要衝である「辻（つじ）」が転じた説がある。

64	雨降	あめふらし	相模原市・由来は、主に丹沢大山（通称：雨降山）に由来する。この山、海からの湿気がぶつかり雨が多い事や、水の神様が祀られ雨乞い信仰の大将であった事から「雨降山」と呼ばれるようになった。
65	寸沢嵐	すわらし	相模原市・由来ははっきりしないが、「すなあらしむら」という古い読みから、自然現象や地形に由来する地名と思われる。
66	鳥屋	とや	相模原市・由来については不明。
67	三ケ木	みかげ	相模原市・由来は、中世に「奥三保」と呼ばれた愛甲郡北部の「日影之村」の一部である「三加木之村」として記録に現れた事に始まる。江戸時代初期には愛甲郡から分離し、津久井県三ケ木村となった
68	当麻	たいま	相模原市・由来には複数あり、源頼朝の家臣である当麻太郎の居館があった説と、仏教の時宗の開祖である一遍上人が大和国当麻を偲んで名付けたという説や、アイヌ語の湿地を意味する「タエマ」「トマム」「トマン」から来ているという説もある。
69	海外町	かいとちょう	三浦市・由来は、かつてこの地域が三浦半島の最南端に位置し、「海外」へ出発する拠点とされていた事に由来する。
70	初声町	はっせまち	三浦市・由来は、平安時代末期から鎌倉時代初期に活躍した三浦一族の武将である和田義盛が、平家追悼後に凱旋した際に歌曲「初声」を作って領民に歌わせてという伝説に由来する。
71	秦野	はだの	秦野市・由来には複数あり、主なものは古墳時代にこの地を開拓した渡来人である秦氏に由来する説と、地形に由来する説では「はだ」は「はだく（崩壊する）」と関係し、「崩壊地形」を意味する説がある。
72	太夫窪	たいくぼ	秦野市・由来は、「弛んだ（歪な）形状の窪地」に由来すると考える
73	名古木	ながぬき	秦野市・由来には複数あり、主なものは「和やかな安住の地」を意味する「和城（なごき）が転訛した説と、「なだらかな傾斜の小平地」を指すという説、また「クニギ（柵）」で出来た家の門が並ぶ様子から「井柵（なくのき・なくぬぎ）」と名付けられ、それが変化したという説などがある。
74	茨原	ばらはら	秦野市・由来は、茨（いばら）の木が生い茂る原っぱ。
75	三廻部	みくるべ	秦野市・由来には複数あり、主なものは昔この村に釈迦の霊像があり「釈迦牟尼仏（みくるべ）」と訓読された事に由来する説と、如來說で、仏様を「如来（によらい）」と呼ぶ事から、この「如来」が「ニクル」と呼ばれ、それが地名になった説。他にも伝説があり、「三廻部伝説」や「源頼朝関連の伝説」がある。
76	不弓引	ゆみひかず	秦野市・由来は、弓を引かない、または弓が弾けないと言った伝説に由来する。
77	依知	えち	厚木市・鎌倉時代の文献に「えち」として登場しており、日蓮が滞在した「依知（えち）の本間重連の代官右馬太郎」の地として記録されている。由来は、鮎が獲れる土地（アユチ）から「エチ」となった事に由来する。
78	温水	ぬるみず	厚木市・由来は、かつてこの地に有った池の水が温かくなったという伝説に由来する。

79	草柳	そうやぎ	大和市・由来は、江戸時代初期に深見村から分村した「草柳村」に由来する。その後、正保年間以前（1644年～1648年）に上草柳村と下草柳村に分かれた。
80	神戸	ごうど	伊勢原市・神戸という地名は全国的に存在し、多くは神社に由来する
81	公所	ぐじょ・ぐぞ	厚木市・大和市・由来は、平塚市の「公所」と同じ。
82	望地	もうち	海老名市・由来は、「相模国分寺を望む地」に由来する。
83	夷参	いさま	座間市・由来は、古代の文献に登場する「相模国夷参駅」と「伊参郷」に由来するものです。これらの記述が、現在の座間市の地名の起源になっている。
84	怒田	ぬだ	南足柄市・由来は、山間部の小さな湿地や、急斜面で崩れ易い田んぼに由来すると思われる。
85	班目	まだらめ	南足柄市・由来については諸説あり、「まだら」説では、山と畑、森と水辺など、様々な景色が入り込んだ様子や、離れ説では、集落から少し離れた場所にあった地域、境介説では異なる地域や境目に由来説がある。また、氏族接では「班目氏」が土地を治めていた説もある。
86	壙下	まました	南足柄市・由来は、台地の急な斜面の下に位置する事に由来する。
87	蓼川	たてかわ	綾瀬市・由来は、かつて開墾された新田が作られた際に「立川野」から「蓼川新田」に改称去れ、後に「新田」が取り除かれ「蓼川村」になったという。
88	小谷	こやと	高座郡寒川町・由来は、平地を見下ろす丘陵に小さな城砦が有った事に由来する。
89	小動	こゆるぎ	高座郡寒川町・由来は、かつてこの岬に在った「こゆるぎの松」に由来する。この松は、風がないのに枝葉が揺れ動く霊木があり、その音は琴のような音を奏でていたという伝承があった。
90	高麗	こま	中郡大磯町・由来は、7世紀に滅亡した高句麗からの渡来人がこの地域に定住し、寺院を建立した事に由来すると思われる。
91	余綾	よろぎ	中郡大磯町・由来には複数説があり、絹織物関連説では、かつてこの地の川で職工が絹布をさらす作業を行っていた事に由来する説と、アイヌ語に由来する説もある。
92	久所	ぐぞ	足柄上郡・由来には諸説あり、「公所」に由来する説と、地名移転説がある。「公所」説は、平安時代から鎌倉時代にかけて地方に設置された役所である「公文所や公所」があった場所に由来する説と、地名移転説では、中村郷にあった「公所」を祖先とする武士達が、新しい土地にその地名を付けたという説がある。また、相模原にあった「久所」は大山街道の宿場町として栄えたが、相模川の洪水で人々が長く滞在する事が多かった為「久しく宿る所」という意味で「久所」と呼ばれるようになったという説もある。
93	古怒田	こぬた	足柄上郡・由来は、山中の小規模な湿地を指す。
94	半分形	はぶがた	足柄上郡・由来については不明ですが、律令国家時代（飛鳥・奈良）時代までさかのぼれるという説が、地元の話がある。
95	松田庶子	まつだそし	足柄上郡・由来は、この付近を支配した松田氏が、領地を惣領と庶子

			に分け与え、そのまま「松田惣領」「松田庶子」という地名になった。「惣領」は長男で「庶子」はそれ以外の子どもを指す。
96	寄	やどりき	足柄上郡・由来には諸説あり、寄り合い（部落の集まり）が木の下で行われていた事から「寄木」（さどりき）になったという説と、明治8年（1875年）に地域の7つの村が合併して「寄木」とした説。
97	都夫良野	つぶらの	足柄上郡・由来は、「つ」は「津（入江）」、「ふ」は「生（生い茂る）」、「らの」は「野（広い土地）」を意味が込められているという。
98	谷ヶ	やが	足柄上郡・由来は、谷に囲まれた地域を指す。
99	海底	おぞこ	愛甲郡愛川町・由来には諸説あり、一つは貝殻の化石が出土した為、昔の人が「ここは海の底のようだ」と想像した説と、「海」という言葉が、実際の内陸の「湖」や「川」に関連して使われていた可能性が考えられる説がある。
100	八菅山	やすげさん	愛甲郡愛川町・由来は、修験道の開祖とされる「役小角」（えんのおづぬ）が703年に東国で最初に訪れた場所である事に由来する。
101	三増	みなせ	愛甲郡愛川町・由来には諸説あり、主なものは隠家説（おんがせつ）で「隠家」と呼ばれた事に由来する説で、特に戦国時代の「三増合戦」と関連がある。永禄12年（1569年）に、武田信玄と北条氏康の間で繰り広げられた「三増合戦」では、北条方の武将である内藤秀行らが敗走する際に、この地に隠れて落ち着いた事から「隠家」とされるようになった説と、「隠川」という地名が中津川のこの地の東側を隠れるように流れていた事に由来するものと云う説もあり、この「隠川」が転じて「三増」になったとも考えられる説。
102	法論堂	おろんど	愛甲郡清川村・由来については不明。

※ 制作、編集にあたり、インターネットの「ウィキペディア」・AI データーを活用して作成をしています。

制作・編集 上総の国いちはらの歴史を知る会

（ふるさと市原をつなぐ連絡会 会員）

連絡先 090-3545-1113